

であつた。最初封建制度の萌生した當時に於ては、封建的支配力を有する武士は同時に經濟的支配力を有する階級であつた。ところが封建制度の成熟した徳川末期の頃になると、此の經濟的支配力を有する階級と、身分的支配力を有する階級とが別々の人間になつてしまつた。即ち封建制度はまだ存続して居り、身分的には武士階級が支配者であつたけれども、經濟的には被支配者即ち支配せられる者となり、其の代りに城下の町人並に田舎の地主達は身分的には支配される連中であるが、經濟的には武士階級を支配する地位に進んで居つた。然も武士階級は肉體的に戰鬥力を失つたと共に精神的にも墮落し、金錢の爲に節を賣るやうなことが幕末に近づくに従つて繁くなつて來た。殊に何等身分の無い者でもお上に對して金を五十兩、百兩獻上すると、苗字帯刀御免を許されて郷士又は郷侍たるの特權を許されるやうになつた。之は即ち武士階級が金權に屈して、自分達の身分を賣つたことを意味するのであつて、封建制度崩壞の徵候が茲にハッキリと現れてゐる。かう云ふ社會現象が信淵の炯眼に映しない譯はない。此の點に關し彼の所論の一節を引いて見ると、『近世は一統奢侈なる風儀流行し、己が分限をも顧みず、領内消亡して百姓衣食に足らざるに因みて、年に數百千の小兒を闇引するにも拘らず、頻りにひどく金銀を誅求して驕慢を縱にす、且つ大名は四品に昇れば侍従たらんことを希ひ、侍従となれば少將を望む(中略)、二本槍の外に金紋先箱を望み、その上に又長刀を持たせんことを欲す。其他多數の妾妓、舞女などを集めて、酒池肉林長夜の宴を爲し、放縱無類の甚だしき者は歸

國、參府共に數多の女を引連れて往復するが故に、財用の費へること極めて多く、常に己が國を墮落するのみならず、道中驛場助郷の百姓を困窮せしむること悲歎の至りならずや云々』とある。就中甚だしきは武士階級が經濟的支配階級と化した所の町人と結托し、盛んに不正を働いたことであつて、彼の大鹽平八郎が大坂に於て亂を起したのは大坂に於ける城代並に其の部下の武士達が斯る眼に餘る醜狀を示したからで、大鹽は眼のあたり之を見て憤激したのである。同時代の信淵の眼にもかうしたことが映らぬ筈はない。

第二節 町人階級の擡頭

徳川家康は其の成憲百個條を以て士は農を始め、農は士を養ふ、士と商は其の下に居るべきであると云ふ、土農工商の原則を定め、百姓を治むるものは武士階級であつても、經濟上では生産者たる農民から武士は養はれてゐるのであると云ふことを明かに示してあつた。當時農業國本は異口同音に唱へられて居つたが、然も實際になると、町人階級が幅を利かして、却つて支配階級を壓迫するやうになつてゐた。其の實狀を明にするために一學者の語つた説話を引いてみると、それは大坂邊りの話であるが、或藩の役人が今日で云へば財務官に當る役人となつて大坂に赴き、歳末に至り自藩の取引先の町人の所に金借りに行つたけれども、店の主人がなか／＼會つて呉れない、再三頼んだが『いやな

かくこの節は多用で會つてゐる暇が無い」といふ返事、それでも「とに角面會だけはさせてくれなければ、自分は殿様に會はせる顔が無い」と云つて、熱心に居催促をした。そこで止むを得ず、その主人に當る人が會ふことになつたが、奥から出て来て「何の用事であるか」と云ふので其の役人は「いや自分は藩主から頼まれて歳末の金策に上つた。どうか金を貸して貰ひたい」と云ふと、其の主人は、「どうも貴方が金を借りに來たのに、其の頭の下げ方が氣に喰はぬ、そんな横柄なことで金を貸せるもので無い、貴方のやうな人には貸すことが出来ない、金を借りたければ、もつと町寧に頭を下げる」と云ふ、そこで其の士は「自分は田舎者で禮儀作法を知らぬ、それで御機嫌を損ねたこともあらうが、どうか一つ金を貸して貰ひたい」と云つたところ、主人は「頭を疊にすりつけて最敬禮しろ」と云ふ、それで其の士は疊の上に頭をすり付け「どうぞ貸して下さい」と云ふと、町人は「もう暫く其のままにして居れ」と云ひ、いきなり其の士の頭の上に乗つかつて咳拂ひをし、「あゝ溜飲が下つた」と云つて大いに悦に入つた上、尙も續いて「貴様は何でもない人間であるが、貴様の主人の顔に免じて金を貸してやらう」と云つて、金を貸す約束をしたと云ふ、そこで件の士は胸の中が煮えかへるばかりに立腹し、其の町人を斬り捨て、切腹しやうと思つたけれども、茲で切腹しては藩主に對して申譯が立たぬ、又役目が果されぬと云ふので、やうやく虫を押へて此の場を外したが、其の後間もなく右の役人は退役して田舎の在所へ引込んだと云ふやうなことが或書に書かれてある。此の一

節を讀んでみても、既に町人階級が經濟的に社會の支配力を得て居つて、武士階級がそれに支配されるやうになつてゐたことが判るのである。即ち封建的身分階級と經濟的支配階級とが互に分離して、其の間に摩擦を生ずるに至つた社會經濟上の兆候である。

信淵に於ても此の點に注目してかう云ふて居る。「今の世に當つて大國を領する諸侯と雖も、三十萬兩以上の金を所藏するものは殆んど稀なり、然るに町人百姓の裡には數百萬兩の金持あり、十萬金二十萬金を持ちたる豪家は甚だ多くして、その數を知らず、天下の貨財豪福の民家に輻輳したること上に説きたる如くなれば、如何でか片手落ちの疑ひなきを得んや」と。斯くして信淵の社會改造論は強く此の前期資本主義の弊害に觸れてゐるのである。故に我々は信淵の思想其のものを検討すると同時に、當時の社會經濟の客觀性に注目し、其の様相を探ることの必要を感じるのである。

第三節 地主小作の關係

徳川時代の地主は大體にして郷土地主、經濟地主、寺地主と云ふやうに分類することが出来る。郷土地主は拙著「郷土制度の研究」に於て分類せる通り四種になつて居るのであつて、其の第一が舊族郷土、次が特置郷土、次が救濟郷土、次は登用郷土である。此等地主の中で最大の勢力を持つ地主は何と云つても經濟地主であつて、其の下に多數の小作人が附いてゐた。斯る事情は徳川末期に相當顯

著に現はれてゐたから、信淵も此の實情を喝破し『國々村々の豪農大商等の從來兼併したる田畑を皆悉くお買上になされて、小百姓水呑に分配下し置かるべきこと愚老が大願なり』と述べてゐる。かうした社會現象に至る所に見られたればこそ、信淵は商業專賣の利益金を割いて農村地主の土地を買上げて、之を貧農、小作百姓に分配しなければならぬと痛論したのである。

第四節 饑饉と間引の慘害

次には凶年に於ける間引の慘害である、徳川時代の農學者中に當時の饑饉によつて農民生活が苛まれた事情、即ち饑饉の客觀性に着眼して思索を凝らしたものが多し其のためである。當時若し饑饉と云ふものがなかつたならば、學者の頭にあれ程緻密な經濟思想や改革思想は浮かばなかつたであらう。元來或る時期を廻して學問が起り、研究が盛んになるのは飢饉とか、經濟恐慌とかの異常な刺戟によつて起るのが常である。刺戟ある時代に學問研究が盛んになるのは、古今其の揆を一にしてゐる。倅て、饑饉の原因は周知のやうに、西南日本と東北日本とで違ふのであつて、西南日本に於ける饑饉の原因は粉糠虫即ちウンカであるが、東北日本に於ける饑饉の原因は冷害である。信淵は前に云つたやうに、西南地方にも足を運んでゐた。西南日本に於ける饑饉は享保十六年が最も激甚であつた。信淵存命の時代は享保饑饉から大分年代が經つてゐたので、實際上此のウンカの慘害を目撃すること

は出来なかのであるが、享保饑饉の有様は西南地方の農家の何處へ行つても古老から傳へ聞くことが出来たに相違ない。東北地方の饑饉は前にも云つたやうに冷害に基くものであつた。かうした近世の饑饉の例は無數にあるが、其中でも日本全土に通ずる大饑饉は西南地方では享保、東北地方では寶曆、天明、天保、此の四回である。饑饉の慘害に就ては茲に諄々説明する暇もないが、天明年度の東北地方の冷害で最も激甚であつたのは陸奥、陸中であつた。同地方にあつては人の肉を食つたとか、子供を食つたとかいふやうな話が今も村々に残つて居る。之により如何に當時の饑饉が悲惨であつたかは想像するに餘りある。信淵はかう云ふ饑饉の状態をよく知つて居り、之に對して方策を講ずることが彼の經濟政策の主要部分を占めてゐる。彼の言葉を藉りて云ふと『この六七年以前凶作にて饑饉に迫りしもの多かりし時御仁政を充分に施し給ふやうに行届くこと能はずして、只御悲歎に月日を暮らし給ひたるべきこと恐察仕り、仰ぐも恐れ入り奉るところなりき、然るに此頃菰かぶりは大道所々に充満し海岸には餓民殊に多く、卑賤なる愚老に至るまでこれを見て悲しみに堪へざりき』と言つてゐる。此の菰かぶりと云ふのは衣服の代りに菰を肩にかけて彷徨してゐたものであつたことであるが、かういふ状態を信淵は親しく見てゐたのである。而して饑饉年には何處でも間引、墮胎が多く行はれた、此の點につき信淵の「經濟要録」の一節を引いて見ると、『今の世に當つて、陸奥出羽の兩國ばかりにても赤子を間引するものは年々六七萬人を下らず、然れどもこれを驚嘆して罵る者のあること

を開かず、却つてこれ怪しむべきの甚だしきにあらず乎』とある。かう云ふ陰惨な社會情勢が彼の頭腦を強く刺戟したのである。

第五節 邊境漸く多事なりしこと

最後に、信淵をして東洋經綸論をあれだけ勇敢に唱へしめた抑々のきつかけは、徳川時代の末期に近づくに従つて北方にはロシアの南下が感づかれ、南方にはヨーロッパ諸國が宣教師を手先として日本侵略の工作が傳へられ、動もすれば、支那や南蠻を通じて我國を侵さうとする氣配が見えて來たことである。以上のことは幕末の外交史を翻けば何人にも領かるゝであらう。

時代が人を作り、人が時代を作ると云ふ言葉があるが、信淵の如き明敏な頭腦と、秀拔な識見と、千萬人に勝れた健康を以て和漢の書を讀破し、且つ多方面の社會事情に接觸することによつて、あゝ云ふ雄大な國家哲學、經濟思想、社會觀を生み出し得たのである。蓋し人物を研究するには人物其のものを見ると同時に、其の人物の活動した時代の社會經濟的背景をあらゆる方面から究め、其の背景の前に當の人物を置いて見る事が大切である。さうすることによつて初めて其の人物なり、思想なりの全貌が描き出されるのである。

第七章 信淵と二宮尊徳・竝に同時代の人物との比較

信淵と略同時代に生存したる二宮尊徳竝に諸學者との比較を試みる。前章に私は彼の存命した時代の社會情勢を背景にして信淵を見たが、今度は同時代に活動した農村の指導人物を特に三人程拉し來り、此等の人物と比較しながら、信淵を眺めたいと思ふ。本書第一章に於ては一般指導的地位に在つた徳川時代の多數農村人物と信淵を比較したが、本章に於ては特に信淵が在世した同時代の著名な人物三人を拉し來つて、彼との比較を試みようとするのである。

即ち先づ見たいのが二宮尊徳、次には大原幽學、次には大藏永常である。信淵は明和六年生れ、尊徳は天明元年生れであるから、信淵は尊徳より十二年早い、大原幽學は寛政九年生れであり、大藏永常の生年はハッキリ判らぬが、略ぼ同年頃であつたと思ふ。之を西曆で云ふと信淵は一七六九年、尊徳は一七八一年、幽學は一七九七年で、何れも殆んど同時代である。従つて信淵の目に映じた社會の様相は同時代の識者たる尊徳の目にも映じ、大原幽學の目にも映じ、大藏永常の心にも映つた筈であ

る。同一様の社會情勢と農村事情を背景にして、信淵は斯の如く思惟し、尊徳は斯く志行し、幽學は斯く教へ、永常は斯く説いた其のことを茲に語ることにする。

二

二宮尊徳の哲學と信淵の哲學とを比べて見ると、尊徳は宇宙は一元全一體で、物質は不滅不増であり、佛教の所謂輪廻の法則によつて循環して居る。繰り返して云へば、萬物は不止不轉である、之を植物に例へて云ふと、種子から草になり、草から花になり、花から實になる。即ち種子が地上に生へることも一つの生成であれば、草から花を開くことも生成であり、又花から實を結ぶのも生成であつて、萬物は常に斯く生々として發展するのである、かういふ原理を彼は天道と云ふ。此の天道を認識することを悟道といふ。悟道して如何に之を人類生活に活用するか、それを尊徳は人間の大道即ち人道と云ふのである。即ち一つの實から良い種子を選んで蒔き、それを培養して良き作物を作ること、人道と云ふのである。繰り返して云へば、種子から花へ、花から實へ移るのは自然の法則であつて、此の法則を善用し利用するには人間の努力と優れた技術に俟たねばならぬ。其のことを尊徳は判りよく説明して『當年は違作ならんと觀じ、又荒るゝは自然なりと見るは悟道なり。大道は不作ならんも耕し、荒るゝも耘す心を云ふ』とある。要するに尊徳哲學の基本原理は輪廻因果の法則を認識し、其

の認識に即して作物栽培を巧みにし、以て人間をしてより良く働かしめて自然を克服し、以て人間社會を發展させやうとする處にある。此の思想は信淵の「天柱記」及び「鑄造化育論」に出てゐる思想とよく似て居る。併し尊徳の哲學思想は非常に緻密で細かく組織づけてあるが、それに比すると信淵の哲學は達筆ではあるが、其の網目の荒い嫌ひがある。併し大體の考へ方は双方共非常によく似てゐる。又尊徳は日本國家の起源を天照大神に求めて居るが、信淵は更に遡つて地球の創造を天之御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の三神に結びつけてゐる。何れにしても尊徳が多分に國學を採り入れつつ支那學を應用し、それに自分の體驗を織り込んで居るやうに、信淵も亦國學、支那學、蘭學を採り入れて、然も徹頭徹尾日本的たらんとしてゐる點は兩者とも其の揆を一にする。併し、下の諸點は著しく異つてゐる。尊徳の社會觀に於ては、社會の階級間に成るべく摩擦を起さないやうに努力せんことに終始し『天地相和して萬物生じ、夫婦相和して子孫生じ、貧富相和して財寶を生ず』と云ふ説き方である。之が尊徳の社會觀の根本基調である。所が信淵はさうは考へてゐない。勿論夫婦相和して子孫生じ天地相和して萬物生ずると云ふ考へまでは同一であるが、信淵に於ては貧富相和する間に財寶が生ずると云ふ風には絶對に考へない、其の點が著るしく違ふのである。信淵は考へる、封建治下の列藩諸侯は皆贅澤な生活をしてゐると共に、家中士も亦何等生産に手を觸れないで、徒食してゐる。かう云ふことで、どうして國家が立つて行けるかと極力封建制度の支配者達を痛罵してゐる。

又農村地主は土地を小作人に貸付けて不當利得を占め、町の町人は自己の營利觀念にのみ没頭し物を安く買つて高く賣ることのみを考へ、細民は爲に非常に困難してゐる。かう云ふことでは日本國家は立ち行かれぬと藩主や地主や町人に對して一大痛棒を加へ、全面的に國家の政治經濟機構を改革せよと、今日できへも却々實行出來さうもないことを、眞向から振翳して激しい改革意見を申述べてゐる。此の點が尊徳と非常に違ふのである。

三

又尊徳の農業經營法は所謂御仕法と云つて、至るところの藩、至るところの村をよく實地に調査し其の土地々に實際が當嵌まるやうに指導する、即ち先づ報徳社を作る前に豫め村人を五人とか十人とかづつ集めて常會を開かせ、其の常會で熟議を遂げてから報徳社を起して實行させると云ふやり方であるが、其の實行の先導者は尊徳自身である。然るに信淵の著述「種樹園法」に見ゆる農場經營論の如き一種の理想論であつて、何國何村に於いて之を行へと云ふのではないのである。併し信淵も一種の組合又は結社を作つて農村を協同化し、それを基礎にして地方を治めさせようといふ考へ方を持つてゐた。例へば租稅滯納の場合を豫想して設くる内密救助講とか、零細貯金をさせる爲の積立講とか云ふのは、農村の協同化を策したものであり、更に又田畧即ち農事巡回教師を置いて農村を技術

的、精神的に指導し、其の基礎の上に立つて信淵一流の國家社會組織を實現させようとしたことは、尊徳と類似するものである。要するに社會改良家としての着眼點は尊徳のそれと著しく違ふが、農村を共同的に組織づけようとする點だけは、兩者間に一脈相通するものがある。

又教育者としては信淵と尊徳とは著しく異つてゐる。尊徳は自ら百姓の指導者を以て任じてゐた。其のことは彼の高弟で、中村藩の改革をやつた富田高慶弟子入りの場面に現れてゐる。高慶は若くして漢學を勉強し、和漢の學問には相當修業を積んだが、然も高慶は考へて、自分の學問は貧窮の極に陥つてゐる中村藩を救濟する役には立ない、そこで誰か良い師匠はないかと探してゐる時に、偶々下野日光の農村更生に身を打込んで居る二宮尊徳のことを聞き、態々尊徳を現場に訪ねて教へを乞ふたが、尊徳は『お前は非常に偉い學者だが、自分は學者ぢやない、百姓の指導をして居る者だ、お前のやうな學者は江戸に行つて學問の道を以て世に立つがよい、俺は百姓の親分だから、お前のやうな學者の相手にはなりにくい』と云つて其の入門を拒絶した。併し高慶は其處で入門を拒絶されては自分の宿願を果すことが出來ないので、辛棒強くも二日三晩も泊り込んで、切に入門を乞ふた結果許され、聽て尊徳の娘までも貰ふて、後に中村藩の救濟の事に當り、非常な功績を擧げたのである。詰り尊徳は農民を自己の身邊に引きつけて指導すると云ふ仕方を探つたが、信淵は自ら農民に觸れようとはせぬ、其の觸れまいとする所に味がある。元來信淵の門に入つて教へを受けようとする者は天分の

相當備はつた青年で、將來指導者たるべき人の指導者を以て任じたのである。彼の伊達藩の小池九藏の如きも信淵門下の一人で、其の藩に歸れば藩廳役人として活動出来るやうな優秀な者を三人四人と教育し、それを通して藩の改革をやらせようとしたのであつて、何處までも高等指導者であり、高等教育者であつた。通俗指導者としての尊徳の筆に成つたものは平易且つ實際的であるが、理論家たる信淵の書いたものが悉く高調且つ深遠であるのは、右の理由によるのである。

四

次は大原幽學との比較である。文獻を通じて観察して見ると、幽學と云ふ人物は親しみの持てる面白い愉快な人物であつた。幽學は寛政九年に名古屋藩に生れ、成年時代には自家で儒學の勉強をし、又撃劍の指導をも受け、多血質の青年であつたやうである。彼は自分の知遇を受けた藩士某が、劍道師範役某に禮を缺いた廉で斬殺されたのを見て憤慨し、其の師範役に立合を申込み、同人を斬殺したのであつた。そこで幽學の父は憂ひ、藩士の身でありながら同輩を殺すとは怪しからぬ、汝が永く此の家に居ると、如何なる災害が一家に降りかかるかも知れない、今日限り勘當するが、我が家は武士の血統であるから、汝は今日家を出て浪人となつても、一生妻を働つてはならぬ、妻帯して子供が出来るると必ずそれが禍の因になるから、妻帯はするな、其の外には汝の生涯に何も條件は付けぬと言ひ

渡して勘當された。彼は其の後劍術や學問をやり、又父親の教を奉じ獨身を守り通して身を持ち崩さなかつた。其の後高野山に上つて佛教の修行をし、近藤某について神道の研究をやり、以て神儒佛三道に通ずるやうになり、年齢約四十歳以後になつて、今日の下總の國香取郡中和村の長部に落着いて村夫子の生活を送ることになつた。當時村の者が幽學に逢つて見ると、彼は和漢の學に長じ、常識が發達して、言語や動作が普通の人でない。そこでどうか他所へ行かないで、永久に此の長部村に止まつて村の青年を教育して貰ひたいと頼まれる程になつた。最初の間は村の名主の一室を借りて教へてゐたが、段々狭くなつたので、遂に教會堂を作つて教へるやうになつた。此の教會堂が出来ると益々塾生が増える、元來幽學は座談が巧みであつたので、誰でも幽學と一時間ばかり話をすると愉快になつたと云ふことである。

五

かうして居る間に、幽學の雷名が四方に轟き、一時は房總地方の青年が一千名も集まり来るやうになつた。ところが斯くも彼の聲名が高くなるに従つて、何時とはなしに幕府の嫌疑がかかるやうになつた。浪人幽學は只者で無いとの注進が幕府に達したので、幕府は幽學の動靜を探偵し始めた、當時幽學は長部村で講書やら、實際の農業指導やらをやつて居つた。今日農村に便利を感じてゐる彼の稻

の正條植は當時幽學が始めたものである。又耕地整理や農家の住宅を分散させて、散居農村を作ると云ふやうなことで幽學の指導によつて實行された。今一つ感心させられることは、彼の指導で組合を作つて農村協同化を策したことである。それは今日の現物出資の産業組合のやうなもので、金五兩に相當するだけの土地を村の農民に出資させて先祖株組合と云ふを作らせて、其の土地を村の希望者に小作させ、其の収入を村人に貸付けて元本を殖して行き、一定の金額に達したならば、それを分配するなり、或は又貧窮者があれば組合總會を開いて分與してやるといふ組織である。かう云ふ風に農業の技術方面を指導し、又村の協同化によつて村民生活の安定を圖り、更に立派な教會堂に於いて多數の青年を教育して知識を高め、精神を鍊成すると云ふやうなことをやるので、村の界限に人氣が高くなつて遠近の人々に尊敬されるやうになつた。此の事を知つて幕府は益々幽學に對して嫌疑を抱くやうになり、遂に幽學も此のまゝでは生命を長く保つことが出来ないと考へたので、安政五年二月十五日立派な態度で自盡したのである。後で幕府の檢屍役人が其の死にざまを見て、今迄自分は多數人の切腹を見たが、こんな立派な態度で死んだ人は見たことがないと云つた位、其の最期は美事であつたことである。然るに信淵は彼よりもより以上に侃々諤々の議論をして然も何等幕府から之と云ふ迫害も受けず、八十餘年の生涯を保つことが出来たのは一に彼の處世法によるのである。蓋し、當時の學者は幕府又は諸侯に接近してゐさへすれば、危険がなかつたのであつて、諸侯や幕府と離れて自

分の思想を庶民階級に傳播させると、直ちに嫌疑がかつたのである。其の點、私の研究した限りに於ては、信淵は一度も農民大衆に向つて呼びかけたことがない。彼の呼びかけた相手は幕府の大老や、各藩の家老や程度の低いところで庄屋位のもので、農村大衆に對し直接呼びかけたことはない。又信淵は諸侯に對して遊説し、又幕府に對して建白もやつたが、其の度毎に彼と幕府又は諸侯との間に意見の相違があり、自分の意見が聴き入れられなくとも、彼は別にそれを意にも介せず、聴かれずんば止むを得ないとして引き退るに止まつたから、摩擦は直ちに解消するのであつた。信淵が一たび江戸に於て聲名が高くなり、訪問者が門前に市をなすに至つた際でも、夫人の注意により一家を疊んで、房總半島の一寒村に隠れ、黙々として著述に努力し、さうする間に世間の評判が消へて信淵と云ふ人間が此の世にあるかないか判らなくなつた頃、又又江戸に出て來て自分の學說を諸侯に進言すると云ふ方法を採つたので、あゝいふ激しい改革論を抱持しながらも、八十餘年の生涯を全ふし得たのである。其の點に於て幽學の行き方と信淵の進み方とは著しく異つてゐる。

六

其の次には農學者の大藏永常と比べて見たい。大藏永常は豊後の生れであつて、二十九歳の時に郷國を出て、大阪に赴き、それから所々を行脚して或は各藩の顧問となり、又自ら一個の學者として農

業に關する著述を澤山出して居る。恐らく徳川時代に於ける農學者中著述の分量からいへば、大藏永も亦其の中の一人であらう。彼の書で今日我々が見て割合に利用性に富んでゐるのは「農家益」である。之は今日謂ふ農村工業書に類するもので、櫛を栽培して蠟を作る方法などを教へたものである。次は「除蝗録」であり、浮塵子驅除を行ふには鯨の油を使ふがよいと云ふことを書いたものである。次は「農具便利論」で、當時使用せられた農具の形式や用法を圖解してある。此の外約二十數種の著述があつて、それを積んで見ると高さ三四尺にも達する程である。併し大藏永常の書いたものは皆百姓相手のものであるから、其の論旨平明且つ低調で、理會し易いものばかり、之が簡易農學者たる永常の學風の特徴である。然るに信淵に於ては其の力作の一つたる「草木六部耕種法」の如き、實に組織立つた堂々たる高等農學原論であつて、當時同書を読んで之を自分のものとなし得る人が日本の農村に果して何人あつたかを疑はしむる程のものである。

前にも云つたやうに、信淵の經濟生活の收入源が各藩の顧問學者として貰ふ報酬にあつたやうに、永常もやはり諸侯の顧問をして貰つた報酬と、更に自分の著述收入とによつて生活してゐた。永常の農書は通俗的であるから、藩によつては彼の原稿を買上げ、之を施板として普及させた。此の原稿料が彼の生活の足しになつたこともあつたであらうと思はれる。學者としての貧乏苦は兩者共に痛感した處であつた。

永常が顧問學者として最活動したのは三河の田原藩である。彼は同藩に抱へられて櫛を栽培し蠟を作り出し、又は砂糖黍を栽培して砂糖製造を教へたことがある。然るに同じ田原藩に抱へられたことのある信淵は、斯る農業技術の實踐的指導は殆んどして居らず、農事巡回制度たる田畧を田原藩で試みたことがあると言はれてゐるに過ぎない。

第八章 信淵研究者間に於ける論争一斑

信淵に對する研究は明治以後非常に盛んになり、彼に關する論者が續出してゐることは、周知の通りである。今かうした研究者間に於て信淵の學說に對してなされた論争の一斑を茲に紹介する。河上肇博士は信淵の人物を以て幕末の社會主義者であつたと云はれて居り、中田公直氏は社會改良論者であると云ふて居られるが、私の意見を端的に申すならば、信淵は今日の社會科學的用語を以てすれば、彼は皇國中心に日本國內の政治經濟を統制して國力を富強化しようとしたのであるから、國家社會主義と云ふよりも、寧ろ皇道主義國家理論家と云つた方が適當であらう。

信淵が勤王家であつたかどうかと云ふことについては異論がある。中田公直氏は信淵は勤王家であつたと云ふて居るが、瀧本博士は信淵は勤王家ではない、彼は宇宙哲學に日本神道を結びつけてゐるけれども、彼の經濟政策論は悉く幕府又は各藩をして行はしめようとしたのであるから、彼は封建支持論者である。本當の勤王論者であるならば彼は夙に幕府から片付けられて居る筈であると云ふ意見

を述べられて居る。併し信淵が日本神道を宇宙創造說に結びつけて議論して居るあたりは、どうしても封建制度の否定論者に見え、幕府倒壊思想に一石を投じたものと考へられ、心中では決して封建制度維持と云ふやうなことは考へてゐなかつたのではないかと想像される。殊に彼の行政機構の改革意見や、全國を打つて一丸として皇國一體の實を擧げ、大東洋の經綸から進んで世界經略にまで進まねばならぬと云つてゐる點からしても、封建制度を其の儘残して、割據的分權制度を何時迄も保存すると云ふやうなことは考へてゐなかつたらうと推測される。勿論さう云ふことは彼の思想の何處にも表面的には現はれて居ないが、彼の強持する政策理論から押して見て、左様であつたらうと考へられる。従つて私は瀧本博士が彼を勤王論者でないとせられた說には賛成することが出来ない。

二

今一つ信淵は自由貿易論者であつたかどうかと云ふことである。中田公直氏は信淵は世界各國と平等原則の上に立つて商業を營ませようとしたのであるから、自由貿易論者であつたと云ふのであるが、之に對して瀧本博士は信淵の通商貿易論は主として藩と藩との間の通商を指したものであるから、今日の經濟學說に謂ふ所の自由貿易とは論旨が違ふと云ふのである。之は見解の相異といふよりも、寧ろ議論の立脚點が違つてゐるのである。中田氏は信淵が行政機構の大改革をやつて、全日本を一體と

する組織を作り上げ、其の力で世界各国と交易する場合には必ず自由貿易制度を採用するだらうと云ふ氣持で説を立てたのであるから、彼を自由貿易論者としてよいと云ふのであるが、西洋學者の立てた經濟學説を以て信淵の學説を測らうとする所にかうした無理が伴ふのである。

次には信淵は土地國有論者であつたかどうかと云ふに、中田氏は信淵が各藩士に與へてゐる給地を藩に取上げて扶持米制度に改むべしと云つてゐるのを見て、土地國有論者であると云つてゐるが、之は中田氏の誤解であるやうに思はれる。給地制度といふのは村々を五十石、六十石或は百石と云ふやうに藩士に呉れ、其の上り高で生活しろと云ふのであつて、所謂知行制度である。此の爲に知行地の農民は往々誅求を受ける、即ち農民は給人たる藩士の一存で租税の外に勞役さへも申付けられる。甚しきは知行主の家庭で使用する物干竿や、薪などまでも村方の農民から取上げることがある。信淵は斯る給地制度を廢して、全藩の租税を一應藩庫に納めしめ、此の藏米中から藩士に給米するようによせよと云ふのである、元來徳川時代の土地所有權は夙に農民の手に入つて居り、武士階級は單に年貢の徵收權しか持つてゐなかつたのであつて、農民は何等の土地所有權に觸れてゐなかつたのである。此の知行權と所有權とを思ひ違へてゐたのではないかと思はれる。

三

斯の如くに諸學者は信淵の學説を批判してゐるが、最後に私の見た信淵の學説を卒直に申すと、私は先づ神道に基礎を置いてゐる經濟思想家としての信淵の眞面目を採る。徳川幕府、各藩の諸侯竝に藩士をば信淵一流の哲學理念を以て啓發し、それから彼の信奉する經濟政策即ち復古法——商業專賣——を實行し、其の利益で一國の歳出を計つて農民の負擔を輕減し、鰥寡孤獨を賑はし、其の他種々の社會政策を行つて王道樂土を日本全土に布くがよい、斯くして成つた富國強兵の實力を以て東洋——滿洲、支那、朝鮮、臺灣——を先づ日本の手に收め、次いで南洋、印度に及び、全世界を經略して皇化を全地球上に及ばさうといふところに、思想家信淵の眞面目があるのであつて、何處から見ても彼は國家主義思想家であることに相違はないのである。勞働者本位に社會を構成させようとする社會主義者では彼はなない。彼の眞骨頭は皇道主義的國家建設論者たるにある。

結 言

一 以上により國家學者、否な農政學者としての信淵の人物の一面は明かになつたと思ふ。斯る特異なる思想の持主であつた彼は、現代日本に如何に影響してゐるであらうか。此の點に就き再應ながら説明することにする。

二

信淵の宇宙哲學は自然科學部門たる地球生成の理論に、日本の原始神道を結びつけたもので、進歩した今日の社會科學や、自然科學から見ると、如何にも荒唐無稽、牽強附會の感がある。更に又彼の經濟學説は當時の政治情勢とは大分に分け離れて實地に應用し難いものがあつた。彼の復古法にしても、三臺六府説にしても、全國を三府十二省の行政區劃にすると云ふ意見にしても、亦大自作農創設案や、世界經略論にしても、當時としては到底容易に實行出來ない所のものを、彼一流の想像力と推理力で大

まかに論じ去り論じ來つてゐる。斯くて彼の經濟學説の多くは理想論であつて、一二の場合を除くの外は抽象的で實際には採用し難いものが多かつた。尤も「田駿年中行事」とか、「泉源法」とか、「丹波巡察記」とか、その他一二の著述は實地に應用されないことはない。信淵は一藩の顧問學者として聘用せらるれば其の藩に取つて最有益なりと信ずる處を文章にして進言したが、何と云ふても其の建策の大部分が先見遠識に過ぎて、當時としては應用の可能性に乏しかつたことは云ふまでもない。併し兎に角俊敏なる認識力と豊富な推理力と緻密な組織的頭腦と、不屈不撓の研究心とは、千古の末まで輝くものである。それでこそ、昭和現代の大東亞戰下に先達思想家としての彼の雄姿が懷憶されるのである。

三

學問研究者としての彼は當時の朱子學派、玉陽明學派等の所謂既成思想家の亞流に染まず、それらの學風から一步進んで、實驗實證に基く佐藤家學に基礎を置いて、日本社會を研究の對象とし、無雙の日本經濟學建設を目指し、此の間大に支那學や西洋學を應用したけれども、決して支那學に囚はれず、西洋學に没入せず、一意大道を辿りつ、日本國家の興隆原理を説き通したのである。

信淵の學説は如何にも廣汎且つ多角的である。其の述ぶところは地球物理學、天文學、植物學、動物學、土壤學、經濟學、兵學、醫學に亘ると共に、思想學的には原始神道、支那思想、ヨーロッパ

思想等々を四方八方から引張り來り、之を緻密な頭腦で整理し、雄渾なる文章に書上げて建白し、又進言したのである。

四

彼が世を果てたのは八十二歳であつて、古稀を出づること當に十二年で、非常な高齡であるが、然も此の年になつても宿昔の志を捨てず、「存華挫狄論」と云ふ排英論の原稿に筆を加へつゝ大往生を遂げたと云ふことである。然も臨終に近い三ヶ月の間は、食べ物は一切咽喉を通らないに拘らず、好きな酒を嘗めつゝ筆を捨てず、思索研究に没頭したと云ふ旺盛なる研究心は、當今の薄心弱行者を鞭撻するに足る。

彼は決して曲學阿世に陥つてはゐなかつたが、世渡りには細心の注意を拂つたやうである。此の點に就いては彼が爲めに一應も再應も辯明する必要がある。彼は一見した所、硬論を吐きつゝも現實を眺めて學説を述べ、又徳川幕府の政策に對しては念所に觸れないやうに努めたが、それは前にも云つたやうに、彼は一生を學者で送りたい、殊に佐藤家學を完成したいとの念願からであつて、彼が若し至る所で思ふ存分のことを語つたならば、彼は必ず忌諱に觸れて夙に世を果ててゐたであらう。かうした信淵の行き方は「農政學解嘲辯」の中に出て居り、殊に此の書の終りの部分がよく其のことを

示してゐる。即ち自分の意見が採用せられなければそれで宜しいとて、すぐくと歸宅し、それ以上に自分の意見を無理矢理に通さうとしなかつた。

茲に尙再應繰り返して語つて置きたいことは、彼は其の家學完成を一生の念願とした其のことである。彼は學問を以て一家を推持して行かうと云ふ意思が旺盛であつた。佐藤家に於ける先祖四代の當主は皆醫學、農學、植物學等自然科學方面の研究に丹精されたのであるが、歴代の戸主は自分一代では如何なる學問も完成されないで、其の足らないところは子供に繼がせよう、子供の代に完成出来なければ孫にやらせよう、それが出来ねば其の曾孫に繼がせようと、一家の傳統を以て學問の完成を致させようとしたのである。此のやうな家族精神こそ尊貴なる日本思想と云はうか、民族精神と云はうか、今人に教訓を垂るゝものが至大である。是れ實に佐藤家學が民族主義農政學の、否な日本精神史の、一典型として見らるべき點である。

五

指導者としての信淵は大衆指導者でもなければ、實踐的教育家でもない。一度信淵の門に入つた青年に對しては理論的に指導し、其の青年を通して自己の意向を實行させて當時の社會をよりよきものにしやうとするのであつた。此のことは彼が曾て伊豫宇和島に行つた時に若松某といふ者の家に滞在

して若松を指導したことがあり、此の曾ての被指導者である若松が後ち藩主から登用されて役人になつた時に、自分に知らせがあつてよい筈であるが、仕事が多忙な爲かまだ知らせが無い。自分はそれを決して不満には思はないが、一度自分の門に入つた人物だ、今度お上の役筋に付いたのならば、どうか一つ立派な仕事をして藩の農政を美事にやつて貰ひたいと云ふことを火の出るやうな文章で小池九藏に傳言してゐる。かうして音信不通の舊門弟若松某を思ひやる舊師信淵の凌々たる大乘的氣魄は、國家興隆を念とする眞摯其のものであつた。

第二篇 現代に生くる信淵の思想

第一章 再び信淵の國家新體制を憶ふて

思想家信淵の理想は彼の死後百年を経たる今日立派に實現せられんとしてゐる。否な實現一歩手前の所まで日本國家が歩み來つてゐる。彼を以て架空の理論家とする説には此の點からも容易に承服出來ない。彼れが生存當時には其の所論が進み過ぎて時代と懸け離れ、多くの餘人に理解せられなかつたまでである。然るに其の後我國内事情の幾多の變轉と、世界狀勢の變化とは我皇國を驅つて信淵が思惟した方向へ急歩せしむるに至つた。此の見地に立つて茲に日本思想界の現象形態を捕へて信淵の思想と比較することとする。即ち大東亞共榮圈建設を目指して爲された過ぎし日の信淵の思想と、今の時代に呼吸してゐる日本知識層の思想とが、如何に近似し、示唆してゐるかを見たいのである。

洵に昭和現代に對して信淵は濃厚なる思想的示唆を一般國民に及ぼしてゐる、其の示唆の第一は、彼の國家哲學は日本原始神道に出發して、國體明徴の高らかに叫ばれてゐる今日、國家思想顯揚の先

驅者としてである。第二に彼が當時各藩の君侯を指導して賢明なる政治家たらしめ、彼等をして只管善政を布かしめようとした點は現下要請されてゐる高邁なる爲政者の率先垂範により時局を乗り切らうとする政治理想と符合するものがある。第三に國內の行政區轄に大改革を加へ、且つ商業に對して專賣制度を行ひ、其の益金を以て庶民階級の爲に社會政策を施し、且つそれを軍備資金に充てしめようとしてゐる點は、現代各般の革新政策、殊に統制經濟政策と一脈相通するものがある。第四には斯くして國內の政治經濟が一應整頓せられて、國民生活が安定を得、國力が増強されたならば、全國民をして彼の所謂「應變の孝」を決行して、舉國一致、大兵動員、東洋諸國に我神徳を光被せしめて、世界に覇を唱ふべしと喝破してゐるあたりは、如何にも百年前に恰も今日の大東亞戰爭あるを豫知してゐたかの如く感ぜられて、欣快を覚えしめずしては已まないのである。切言すれば日本帝國再建の手段として、一方に皇道主義による國家觀念を鼓吹し、他方勤勞者本位に即する統制經濟を斷行し、斯くして培はれたる總國力を擧げて海外大進出を圖り、皇道を萬邦に布きて國々の民草を信服せしめよと叫んでゐるあたりは、國家總力戰の唱へらるゝ今日、民族的感銘を深からしむるものが多大であつて、現代知識人の思惟する廣域圏の政治、經濟、文化理論の高峰を摩してゐる。斯くて彼は一百有年前の人物でありながら、恰も現在に生きて居るかの如き銳感を與へる。少くとも彼は彼の生時に於て、今日、日本國家が盟主となつて高度封建制度を大東亞の天地に樹主することの不可能でないこと

を豫見してゐたかに思はるゝ。其の事は以下紹介する現代思想界の通念とも云ひ得べき大東亞共榮圏建設理論と比較して見て判るであらう。仍て私は茲に信淵經濟學の結論とも云ふべき彼の宇内混同論と對比する爲に、現下日本少壯知能層の動員によりて成りたる世界新秩序論、大東亞共榮圏の文化理論、並に農政理論を引き來るであらう。

斷つて置くが、歴史上の人物たる信淵の思想が世界新秩序論乃至大東亞共榮圏理論として現に生きてゐる事實を證明する爲に引用する思想は飽までも客觀的且つ大衆的性質を帯び、私自身の主觀から生れたものであつてはならぬ。此の考へ方からして、私は茲に昭和十六年に私の關係する國策研究會内に臨時設置せられた大東亞問題調査會で研究せられた三個の案を持つて來る。此の案は各方面の少壯學者が集り研究集成したもので、信淵の宇内混同論の現代的性格を測るには最もよき對照資料である。併し右三案の文章は高度に抽象化され、壓縮されてあつて、青年諸君の讀物としては稍難解であると思ふので、私の手許で全部平易に書き直して見た。即ち引用する思想は何處までも客觀的に取り扱つてゐるが、唯文章のみが私の手により平易化されてゐるのである。

第二章 大東亞共榮圈と世界新秩序論

信淵の經濟思想の最高頂は宇内混同の論である。宇内混同は彼が思索體系の結論と云ふてよいのであるが、それだけ彼が所論は昭和現代の日本思想界に聯通してゐるかに見える、本章に於ては専ら其の事を取り上げて立證する。

併し乍ら、各廣域圏の具體的獨自性は必要であるけれども、廣域圏秩序が現段階に於ける世界新秩序としての正當さを持ち來る爲めには、本質的に共通の原理に立つ所がなければならぬ。それは即ち、これまでの世界舊秩序の缺陷を是正し、矛盾を克服したものとて、そこに新秩序が現はれねばならぬ當然の歸結である。廣域圏秩序が、眞に新秩序たるに値する爲めには、舊來の秩序原理はそれを其の儘として、たゞ甲國が乙國に代替すると云ふが如き事ではあり得ない。此の意味に於て廣域圏秩序は、舊秩序に於けるが如き、絶對主權、機械的民族主義等の原理、又資本主義、帝國主義、國際自由經濟の諸原理及びそれから生れるところの「持てる國」「持たざる國」の對立狀態、更にはかゝる諸原理を背景とした歐洲の世界支配又は米英の世界制覇等を克服し、大いなる歴史的運命的な結びつきを基礎とし、強力な指導國を中心としつゝ、諸民族が各々其の處を得て、指導と協同の原理の上に結ばれ、豊かな自主性を保持し、凡ゆる搾取關係を排除し、綜合的計畫と統制に依つて共存共榮の實を擧ぐべく、新しいより高い原理に立つ秩序の建設を、意味するものでなければならぬ。

併し乍ら、各廣域圏の具體的獨自性は必要であるけれども、廣域圏秩序が現段階に於ける世界新秩序としての正當さを持ち來る爲めには、本質的に共通の原理に立つ所がなければならぬ。それは即ち、これまでの世界舊秩序の缺陷を是正し、矛盾を克服したものとて、そこに新秩序が現はれねばならぬ當然の歸結である。廣域圏秩序が、眞に新秩序たるに値する爲めには、舊來の秩序原理はそれを其の儘として、たゞ甲國が乙國に代替すると云ふが如き事ではあり得ない。此の意味に於て廣域圏秩序は、舊秩序に於けるが如き、絶對主權、機械的民族主義等の原理、又資本主義、帝國主義、國際自由經濟の諸原理及びそれから生れるところの「持てる國」「持たざる國」の對立狀態、更にはかゝる諸原理を背景とした歐洲の世界支配又は米英の世界制覇等を克服し、大いなる歴史的運命的な結びつきを基礎とし、強力な指導國を中心としつゝ、諸民族が各々其の處を得て、指導と協同の原理の上に結ばれ、豊かな自主性を保持し、凡ゆる搾取關係を排除し、綜合的計畫と統制に依つて共存共榮の實を擧ぐべく、新しいより高い原理に立つ秩序の建設を、意味するものでなければならぬ。

併し廣域圏の廣域圏たるの本質は、それが諸國家乃至諸民族を包括する廣大なる地域に於ける所の新秩序たる所になければならない。斯る地域は、國防圏、經濟圏乃至文化圏として、共通の使命の下に結ばれ、圏外に對しては自主性を堅持し、然も尙それ自體が一つの國家ではなく、多くの國家を包括するものであるが、同時に又それ自體が全世界を蔽ふものではなく、數個の廣域圏が全世界の中に存在すると云ふ關係にあるのである。

近代世界の絶對主權的民族國家が、其の國家自體の中に大いなる缺陷矛盾を包みつゝ崩壊せんとし、てゐる事は既に知る所であり、そこに、何かより大なる有機的新組織が要求せられてゐるのであるが、併し其の事からして、直ちに世界民としての個々人を單位として、人類全體を單一のものに組織づけんとする事は、少くとも現段階に於ては不可能なるのみならず、それは一つの誤謬と言はねばならない、何となれば、世界秩序の基礎は飽くまでも各民族及び民族を基盤とする國家に置かれる事に於てはじめて正當であり、然も廣域圏秩序は、かゝる現實的根據の上に立つ限り、眞實の權威を持ち得るのである。

従つて、かゝる廣域圏の遠き將來の運命は別とし、廣域圏そのものは、それ自體が既に一體的に完成されたものではなく、それは多くの民族乃至國家を包攝し、其の上に立つ處のものである。それらの民族乃至國家は、それ自體絶對主權を持つて個々に分立するのではなく、廣域圏なる一箇體内に聯

結せられるものである。而してかゝる多くの諸國家を、其の個々の分立關係より脱して、より大なる一體に結合せしむる媒介的役割を果すものが、即ち中心的指導國に外ならない。即ち廣域圏其のものは、固より連帶的な基盤の上に立つのであるが、併しそれ自體最初から一體的な存在を示すものではなく、諸國家乃至諸民族の併存關係が、指導國の指導媒介を通じて、初めて一つのより大なるものへ統合せられつゝ現れるのである。此の關係は恰も自然状態に在る群集が強大なる統治者に依つて初めて一體的な國民にまで高められ來つたと云ふ關係と類似してゐる。此の場合、かゝる統治者の絶對權力が失はれれば、直ちに國民が解體して無政府的なる群集に逆轉する如く、廣域圏に於て指導國の指導媒介が有効な實力を發現し得なくなると、當然廣域圏は其の一體的存在を失はざるを得ない。此の故に、指導國の強力的存在は、廣域圏成立の絶對的要件なのである。

廣域圏の自主安全性を確保し、獨自の文化を建設し、圏外勢力の干渉を排除し、圏内の平和を維持し、圏内の生産力を昂揚して以つて共存共榮の實を擧ぐるところの中核體をなすものは常に指導國である。之は指導國の權利たると共に義務に屬するものである。

但し其の指導國は單獨にかゝる役割を背負ひ、孤立的にこれらの任務を遂行するのではない。それは常に圏内諸國家乃至諸民族の協同を背景とするのである。指導と協同の關係こそ廣域圏の原理である、然も此の關係は相互併存者間の機械的な協同を意味せず、それは指導國の指導媒介による所の有

機械的協同であるが、さればとて、又此の指導は決して権力的専制や抑壓によるものではない、指導と協同の關係は實に實力と道義に對する信頼、悦服の關係であつて、權力で強要する事によつて成立し得る關係ではなく、指導國の實力と、道義と、諸民族に對する組織能力とによつて生ずる所の關係である。廣域圏が新秩序となり得るのは、單に其の地域的外形に依つてではなくして、實にかゝる建設原理に依つてである。

かゝる廣域圏が、國防的にも經濟的にも文化的にも、或る程度の自足的一體性を具備すべき事は、廣域圏の當然の要請ではあるが、併しそれは他との關係を斷つた所の閉鎖的なものではあり得ない。廣域圏秩序は、それ自體が絶對的な自足性を以て成立するのではなく、謂はゞ諸國家諸民族と全世界との中間に位置すべき存在たることを本質とするのである。此の故に、廣域圏は常に内には固く聯結し、外に向つて開かれたものである。之をこそより、高き世界秩序と云ふのである。

二

廣域圏の本質が、指導國の指導媒介を中樞とする諸民族諸國家の協同體制たるに在る事から、其の政治組織の根本原則も亦明らかであらう。即ちそれは舊秩序に於けるが如き絶對主權に基く民族國家原理や、民族の機械的な自決平等主義の上には成立し得ないのである。

固より民族乃至民族を基盤とする國家は、世界秩序の一單位たる價值を持つのであつて、各民族乃至國家の生命、文化、個性は、新秩序に於ても厚く尊重されねばならない。それなくして曾て存したる征服、支配、抑壓の關係と全く異なる所の指導と協同の關係は成立しないのである。擽取、抑壓、分割、支配は、舊秩序に於ける帝國主義の姿であつて斷じて新秩序の姿ではない。併し乍ら、其の事は決して又舊秩序に於ける絶對主權や自決平等や利己主義の原理を是認する事ではあり得ない。かゝる舊秩序は今や崩壊して、より高き、より大なる諸民族の廣域的協同關係、即ち世界史の要請する所の新しき秩序たるを知らねばならない。各民族各國家がそれぞれ其の個性を發揮しつゝ、然も更により大なる生活圏に統合せられるといふ事が、廣域圏の眞の姿を示すものである。

然るに、各民族各國家の個性、文化、實力、發展段階は、現實に於て決して平等ではない。そこには多くの差等が存するのである。かゝる差等を、舊秩序に於ては公式的機械的な平等の假面を以て蔽ひ、其の實は其の蔭に於て二三の強國の制覇を保障したのであるが、かゝる僞瞞は新秩序に於て排除せられねばならぬ。有機的、生命的な指導と協同の原理は、機械的な惡平等主義とは斷じて相容れないのであつて、それは各々に平等を與ふるものではなく、各々に其の處を得しむると云ふところの、有機的差等の原理に立たざるを得ない。かゝる差等は單なる恣意的な差別待遇ではなく、差等が同時に對等なるが如き公正なるものたる事を要する。之を約するに、指導國の指導媒介を通じて、廣域圏

内の各國家各民族が、それぞれにふさはしい地位、役割、負擔を與へられ、其の現實に即して各々其の處を得る事が必要なのである。

廣域圏内に於ては此の故に、民族乃至國家の地位にそれぞれの差等があり得る。指導國、指導される獨立國、被保護國等々がそれである。如何なる國が此等の何れの範圍に入るべきかと云ふ事は、多くは歴史的に既に定まつてゐる場合が多いであるが、廣域圏は單に與へられてゐるものではなく、之から形成せられて行くものであるから、廣域圏全體の見地から最もよく其の自主安全性を防衛し、圈内秩序を保持し、圈内の經濟的、文化的發展を確保するやう、諸民族の歴史、性格、能力、民族、地政等を考慮して、決定さるべきである。

指導國とは、廣域圏の據つて以て存在し得る不可缺の中樞であり、廣域圏秩序の指導媒介の中核たるもので、圏外に對して廣域圏の自主安全を防衛し、干渉を排除し、圈内の平和と秩序を保持し、諸民族諸國家の協同と統合とを圖るべき中核たる事を其の任務とする。但し先にも云ふ如く、指導と協同の關係は、征服抑壓搾取とそれへの屈服と云ふ關係ではなく、本質的に生ける人格的生命交感の關係で、實力と道義と讚嘆と信頼と悦服の關係なのであるから、指導が指導國たるにふさはしい實力、道義、組織力、品性を具へる事が根本前提である。強大民族の霸道的暴虐や、自己萬能主義と弱小民族の徒らなる抗争反逆との上には、指導と協同の關係は成立せず、暴虐、輕侮、抑壓、屈服、忍従、

怨恨、憎惡、復讐心を以て、廣域圏秩序を建設する事は斷じて不可能なる事を、特に指導國に於て忘れてはならないのである。

廣域圏内の獨立國と云ふのは、一應在來の獨立國と略々同様の屬性を持つのであるが、併し廣域圏内の獨立國に於ては、常に指導國の指導媒介に服すべく規定せられて、絶對主權の保持は許されない。そこで、廣域圏内の獨立國と指導國との關係は、形式的には外交使節に依つて外交乃至條約の關係で結ばれるとしても、實質的には常に内面的指導に服すべき關係にならねばならない。

獨立被指導國と云ふのは、豫め條約を以て指導國の指導權を認めんとする關係の國である。例へば特に軍事外交等につき指導國の代行に委すが如きそれである。之は一應は獨立國たることを認められ、國內の統治には原住民をして當らしむのであるが、指導國は高等辨務官、指導官等を派遣して之を保護指導する。近來の趨勢に於ては、此の保護國なる名稱は寧ろ好まれない傾向があり、寧ろ獨立國と云ふを憚ぶが如き狀況であるが、世界の現實に於て、諸國家に實力の差等が現實に存する以上、充分なる獨立能力なき國に對し、當該廣域圏の指導國が指導保護に任ずる事は名稱の如何に拘らず、實質上は當然の事である。上述の如き獨立國に對してすら指導媒介を認めるのであるから、況んや被指導民族に對しては、尙更然りと云はなければならぬ。たゞ云ふまでもなく、指導國によるかゝる保護指導は廣域圏理念に基き、各民族各國家の福祉と向上とを尊重してなされるべきであつて、往々在

來の保護國關係に見られた如き、宗主國の利己主義の假面であつてはならないのである。

此等の外、指導國が直接統治の任に當るべき直轄地域も考へられる。特に廣域國防衛の爲めの戰略據點及び其の背後地は、主として國防を擔當すべき指導國の直接把握する事を要する場合が多いのである。かゝる直轄地域は、原則としては、指導國が其の總督、長官乃至知事を以て統治する事となるのであるが、等此の中にも、それぞれの地域又は民度に應じて、原住民の政治行政への參與程度にはそれぞれの段階乃至差等があるべきである。併しいづれにしても、廣域圏に於ける直轄地域は植民地の觀念を以て律すべきではない。植民地の觀念は、特に近代に於ては、帝國主義的な支配搾取と結合したものである。廣域圏の新秩序は、かゝる帝國主義を克服したる後の形態の上に成立すべき事は、既に述べた如くである。

廣域圏内の諸國家が指導國の指導媒介を通じて、初めて一體性ある結合關係を持つこと上述の如くであるが、然も構成民族相互の關係も、亦自ら密接となり行く事は必然である。廣域圏秩序其のものも自らそこに共同の運命と使命を自覺し、一體的意識を持つ事を要請するが故に、廣域圏の政治的組織としては指導國と被指導國との多邊的な個別關係のみならず、廣域圏全體の一體的關係も亦考慮せられねばならない。併し乍ら、廣域圏のかゝる一體性が強化せられ、同化せられ、或は對等の立場での聯邦にまで發展する事になれば、それは既にそれ自身が一個の國家である事を意味し、或は逆に指

導國の存在が無くなつて、國家と國家との對等關係となつたのであつて、隨つてそれは諸國家の聯合に過ぎぬのであつて、何れも既に廣域圏秩序の本來の姿ではなくなつてゐるのである。

廣域圏の政治的組織原則を斯く考察して來ると、在來の國家乃至政治單位間の如何なる結合方式とも異なる獨特の複雑な特質を持つべきものなる事を知る。即ちそれは、獨立諸國家をも含むが故に單なる併合でもなく、直轄地域があつてもそれは所謂植民地ではない。由來保護國と被保護國との關係はある部分には實質上適當しても、全般的にそんなものではない。それは又曾てのヴェルサイユ體制と結合した「委任統治」の觀念でも理解されないと共に、一州又は一支邦を平等の單位とした聯邦でもなく、又獨立對等の邦が共通の帝王に忠誠を誓ふと云ふ形でもない。對等國間の條約乃至規約による同盟、聯合、聯盟の關係も亦、廣域圏の關係ではあり得ないのである。つまり廣域圏は此等の在來の方式の何れでもなく、寧ろ此の諸方式を克服し、雜多の關係を同時に包含するところの複雑多様な組織體なのである。

三

廣域圏は指導國を中核として形成せられるもので、指導國がかゝる廣域國防及び經濟圏を形成し指導する事は、指導國の存在を確立する上に絶對不可缺なものである。廣域國防衛の中核は云ふまでも

なく指導國自身であるが、併しかかる廣域圏と經濟圏に結びつくものは、常に指導國のみならず諸民族諸國家の側から見ても不可欠なのである。何となれば、それなくしては諸民族諸國家の存在は現代の世界に於ては殆ど内容を伴はない極めて貧しいものに過ぎないからである。たゞ諸民族諸國家は、指導國の如く自らの力によつて生活圏の擴大形成を實現し得ざるが故に、かゝる秩序建設の中核的主動力たり得ないと云ふのみである。此の故に、諸民族諸國家が自己を搾取壓迫せる外來勢力を排除し、自らの存在を廣域圏の中に高めんと欲するならば、かゝる實力ある指導國に協力して、共存共榮の廣域生活圏の建設に挺身し、その保持防衛に力を盡す事こそが、效果大なる唯一の方式なのである。かゝる意味に於て、共存共榮の廣域圏建設の前提をなす絶対不敗の國防體制確立の爲には指導國の戰爭遂行に總力を擧げて協力し、其の防衛に協同すべき事は、諸民族諸國家の義務と云ふよりも寧ろ權利なのである。何故なれば、廣域圏内の諸民族諸國家が眞に自己の豊かなる存在を獲得すると云ふ事は、袖手傍觀して單に指導國の活動の結果を受動的に享受すると云ふ事によつてはなく、それを自らの課題として自覺し、究極的自發的に其の一翼を擔ふ事によつてこそ初めて可能だからである。かゝる見地に立てば、對外的な戦ひの過程に於て指導國と共同の苦しみを領つ事にも、究極的な意味があるのであつて、諸國家諸民族がそれを自ら克服してこそ、初めて共榮の樂しみを領つ眞實の資格が生ずるのである。左様な意味に於て、此の相互關係は正しく廣域圏の原則としての共同防衛の

眞義を理解せしむるものである。

併し此の共同防衛の原則は圈内諸國民の機械的協同と云ふ意味に於て理解されてはならない。防衛の中核的存在は、飽くまでも指導國なのであるから、諸國家の努力は、何よりも先づ此の指導國の國防力の強化への協同として現はれなければならない。そしてそれは國防總力の強化であるから、單に武力、戦力のみではなく、度域圏全體の國防資源の開発、國防生産力の強化、軍隊武器の輸送通過、鐵道港灣の活用、戰略據點の活用等々は云ふに及ず、政治戰、經濟戰、文化思想戰の全面に亘る協同でなければならぬのである。

四

廣域經濟は新秩序の經濟として、イギリス的秩序の經濟と全く異つた新しい原則の下に立つものである。イギリス的舊秩序の世界經濟は、資本主義的秩序であり、帝國主義、國際的自由主義を以て構成されたものであつた。廣域經濟の構成原則は、此の資本主義的秩序の缺陷を是正し、帝國主義國と國際的自由經濟に代ふるに、協同計畫と、共榮原則を以てするものである。

自由貿易制と金本位制とを以て其の統一を圖つたイギリス的經濟が崩壊し、世界經濟が無秩序の混亂に陥り、諸列強の對抗闘争が赤裸となるに及び、英米は世界に於ける資本主義的獨占國たるの性格

を露呈し始め、自己の支配的領域を閉鎖して、ブロック経済を形成した。ブロック経済は、英米資本主義的獨占國が持てる國として其の持てる物資を封鎖し、他の持たざる新興國をこれから閉出さんとする所のものに他ならない。かくてブロック経済は、資本主義的舊秩序の依然たる延長であり、廣域経済とは自ら其の本質を異にするのである。廣域経済は、寧ろ此の英米現状維持のブロックを打破するところにこそ生誕するのである。

廣域経済は又ソ聯的共產主義秩序とも本質的に異なる。共產主義は資本主義の否定の上に立つてゐるが、併しそれは依然として資本主義の背後に横はる所の近代的思想の下にあり、それは資本主義と同一面上に於て、資本主義に代はらんとするものに過ぎない。従つてそれは、近代思想の謬想を同じく身にまとい、舊秩序の陰鬱な形態の再現を意味するにとゞまるのである。廣域経済は、凡そ一切のかかる舊秩序の完全なる拂拭の上に立つものなのである。

廣域経済の内部構成原則の根本理念は、資本主義とも、共產主義とも、其の本質を異にする所の共同経済である。資本主義と共產主義の兩者のみを認め、第三の経済體制を認めない見解は近代思想の謬想から出てゐる見解であつて、吾々は茲に第三の範疇としての共同経済を考へる必要がある。廣域経済はかゝる第三の範疇としての共同経済を意味するのである。廣域経済は一つの経済統一體であり、然もそれは政治的統一體に裏づけられ、政治によつて構成されるものである。それは私有財産制

度を肯定すると共に、他方に於て私経済專一主義は否定され、経済は其の不健全なる私的優位化の地位を去つて、本來の正しい高度の文化的地位を與へられ、富の力に代つて勤勞が、營利に代つて奉公が、享樂に代つて節約が、階級的對立に代つて總親和が廣らされる。而してかゝる共同経済は又政治経済として自由主義経済を否定し、経済の計畫化を本質とするものである。即ち共同経済は同時に計畫経済である。斯くて、共同経済は倫理経済、政治経済、計畫経済として其が本來の課題たる國防の、充實、國民生活の安定確保を果さんとするものである。

廣域経済はかゝる共同経済たる事によつて新秩序となる。而して此の場合、指導國を始め國內の構成國家乃至民族の経済は共同組織となり、同時に又廣域圈全體の共同組織とならなければならない。即ち指導國と被指導國との経済關係は、全一的共同経済理念の下に置かれねばならない。斯くてこそ舊秩序の帝國主義は解消されるのである。帝國主義は資本主義國の植民地に對する資本主義的搾取を意味するが、かゝる關係に代ふるに、茲では指導國と被指導國との間に指導、協同、共榮の新關係が確立される。指導國の搾取でなく、又指導が被指導國の反感を買ふことなくして、そこに協同が見られ、そしてそこに廣域経済たる事による共榮の新關係が現はれるのである。

先づ指導國の経済指導については、之迄の本國資本主義的利益の見地に基く資本主義的搾取と其の本質を異にする。それは廣域経済に於ける國防充實と生活確保の見地に基く経済指導として現はれ

る。廣域經濟の中核たるものは指導國の經濟力であつて、廣域經濟は此の指導國の經濟力に基く指導によつて始めて形成され、發展して行く。而して指導國は廣域經濟を自らの生命圏とするものであつて、指導國の生命圏としての廣域經濟の形成と發展は、指導國にとつて絶対に必要である。然も、かゝる指導國の絶對的要請は、同時に廣域經濟を包蔵する被指導國にとつても同様に絶對的要請となつてゐるのであつて、指導國の必要物は同時に被指導國の必要物であると云ふ一體制が與へられる。斯くて指導國の生命圏としての廣域經濟の形成と發展は、同時に被指導國の爲の廣域經濟の形成と發展を意味すると云ふ、相對的性格が現はれるのである。

斯くの如く、廣域經濟に於ては帝國主義的搾取は拂拭せられ、廣域經濟を構成する被指導國の經濟は、それ自體夫々自主的經濟となる。從來の帝國主義下に於ける植民地の經濟は、只管本國資本主義の爲の經濟に過ぎなかつたが、廣域經濟に於ける被指導國の經濟は、各自の生活上の見地に基き必要な様式が與へられ、自主的地位を持つこととなるのである。かゝる自主的經濟の確保は、廣域經濟に於ける共同關係の基礎となるものである。併し乍ら、茲に注意すべきは、かゝる經濟の自主性は、絶對的な獨立性を意味しないと云ふ事である。何故ならば此等の被指導國の經濟は、廣域經濟の一要素となる事によつて、其の自主性を齎し得るものであり、廣域經濟を離れて獨立に存し得ない性質のものである。

被指導國の經濟の自主化は、廣域經濟に一體的に結びつけられ、之に屬する事を其の本質とする。其の經濟の自主化の中に、廣域經濟に於ける一環たる地位が内在してゐる。従つて、此の自主化と廣域經濟への從屬とは、矛盾する所のものではなく、同一の問題なのである。即ち此の自主化は之を適確に表現するならば、廣域經濟の一環たる地位の自覺に基く所の自主化である。斯くて被指導國の經濟は自主化すると共に、同時に廣域經濟全體の計畫に従ふ所のものである。それは、廣域經濟全體の計畫又は共同の基礎である。斯くて、廣域經濟に於ける協同の關係は、全體的計畫と被指導國の經濟の自主性を基礎として、其の上に形成さるべきものである。

以上の如くにして、廣域經濟は此の指導と協同を中核とする統一的全體に於ける指導と協力の形として發現し、それが一圓内聯立の形成によつてのみ實現するのである。従つて此の共榮は政治的、文化的、地理的統一性によつて裏づけられ、廣域圏としての運命的統一體たる認識に立つて働かんとする決意の下から生るゝ共榮である。斯くて廣域經濟の共榮たる所以は、重要資源及び生産要素の相互補填による統一的經濟體の形成によつてのみ、國防の確保と生活の安定とが圖られ得ると云ふ歴史的運命を感じ、相互に共同の世界史的使命を遂行して行く努力の裡に於て之を達成し得るのである。

廣域經濟は既に述べた如く、帝國主義を否定すると共に、帝國主義と共に舊秩序の支柱をなす國際的自由經濟をも否定するものである。廣域經濟は意識的に構成される經濟統一體であつて、經濟の計

畫化を本質とする。先に廣域經濟に於ける協同は計畫を基礎とすると述べたが、それは廣域經濟の持つ本來の性質に基くのである。斯くて廣域經濟の内部構成原則たるや常に計畫に基いて行はれるものであり、自由貿易制、金本位制はこゝに其の姿を喪ふことゝなるのである。即ち、自由貿易制に代つて計畫交易制が、金本位制に代つて管理通貨制が現はれる。而して廣域經濟全體の計畫は、指導國を中核として形成され、且つそれは單純なる經濟的合理主義によつて行はるべきものではない。經濟的分業乃至適地適業主義は、此處に於ける絶對唯一の原則ではない。其處では、國防上の觀點、指導國經濟自體の強化、被指導國經濟の自主性、廣域經濟確保の觀點等が、同時に合せ考へられねばならないのである。

以上の如く、廣域經濟は、資本主義、帝國主義、國際的自由經濟に代つて、共同經濟に基く處の指導と、被指導、協同及び計畫を其の内部構成原則とすると云ひ得るのである。

五

世界の新秩序としての正當さを以つて現はれる所の廣域圈秩序を考ふる限り、如何なる廣域圈も舊秩序の誤れる原理を克服して、新秩序の共通原理に立つ所あるべきは言ふを俟たぬ所である。廣域圈の世界史的意義と云ひ、指導と云ひ、協同と云ひ、共同防衛と云ひ、共存共榮と云ふが如きは、正にかゝる意味で、廣域圈秩序の不可欠な共通原理である。此等の基本的思想に於ては何れの廣域圈も共通でなければならない。

併し乍ら、學問、宗教、美術、音樂、その他衣食住一般に關する文化様式に至つては、それぞれの廣域圈がそれぞれの獨自性を發揮して、互に妍を競ふ事こそ却つて望ましいことである。其の故にこそ、一律的な文化様式を以て世界を蔽ふが如き、跛行的な世界秩序は排斥せられ、それぞれの傳統風土に育まるゝ所の本來的な自主的な廣域圈秩序の形成こそが要請せられねばならない。斯くてこそ、初めて世界は眞に文化的な、豐醇な世界たり得るのである。

之と同じ意味に於て、廣域圈も亦、それに含まれる諸民族の個有文化をば其の本然の姿に於て發揮せしむる事が、廣域圈其のものを豊かならしむる所以でもあるのである。指導國が妄りに所謂同化主義を強行する事は、畢竟するに文化的な帝國主義の過誤を犯す虞れがある。特に宗教、文化、習俗の如きは、妄りに之に干渉して早急なる劃一的統一主義に陥らざるやう戒心すべきである。

さればとて、又如何に無智蒙昧にして殘虐野蠻なる事も、それが宗教、文化、習俗と稱せらるゝものなるが故に、絶對に之を放置すべしと云ふなら、それは即ち所謂愚民政策に他ならず、諸民族の向上發展を圖り、其の共存共榮を實現せんとする廣域圈の本質に反する結果を招くものたらざるを得ない。一般の知識教育の普及育成を通じて、徐ろに諸民族資質の向上を指導する事は、即ち指導國の一

つの重要な任務と云はねばならない。

諸民族の文化習俗を尊重しつつ、然もそれが愚民政策に墮せず、諸民族資質の向上改善を指導しつつ、然もそれが文化的帝國主義に墮せないやうに指導するには、極めて微妙且つ困難なるものを含むと云はねばならず、故に何よりも先づ此處に指導民族自身の豊かなる文化と品性包容力と綜合力とを集中しなければならぬのである。かゝる困難なる課題は、指導民族自身が先づ其の個有の傳統に立ちつゝ、然も不斷に自らの新しき綜合的文化を建設し、諸民族も亦其の本來の傳統を失はずして、然も不斷に脱皮作用を以て、かゝる大いなる新文化の中に自己を高め得る事に依つてのみ初めて解決せられるのである。

かゝる相互の創造的實踐的努力は又、一つの廣域圏文化が他の廣域圏文化に對する關係に於ても重要である。廣域圏が独自の文化を發揚すると云ふ事は、決して他の文化と對立闘争し、他を排斥せんとする事ではなく、寧ろそれぞれの廣域圏が、各々独自の文化を充分なる形に於いて發揚する事に依つて、世界を眞に文化的な豊かな世界たらしめんとする事でなければならぬ。各々が其の独自の文化を提げて世界文化に貢獻しつつ、他の文化より學ぶべきを學び、それにより自己を創造し改善擴大すると云ふ事が望ましいのである。此處でも亦廣域圏は廣く開かれたる全體の一部でなければならぬ。

六

廣域圏が、指導國と構成諸國との間に指導と協同の法則に據つて成立する事、かゝる指導と協同の法則は、權力抑壓とそれへの忍従とは根本的に異り、實力と道義に對する信頼悦服の關係たる事、而して諸構成國がそれぞれの能力、民度、發展段階に應じて各々にふさはしい地位役割を認められ、各々其の處を得ると云ふ關係に立つべき事等については、既に説明し來つた通りである。

更に指導國と各構成國とのより具體的な關係は、多くは政策的技術的問題に屬し、各廣域圏の性格や、其の發展段階に従つて異なるべき所もあるが、併し少くとも次の如き關係は、一般に認めらるべきであらう。

- (一) 軍事國防については、前に説く如き廣域圏の意義を自覺して、共通の國防意思に基く指導と協同の關係が確立される事を要する。
- (二) 外交については、共榮圏の一體性を保持し得るが如く考慮するを必要とする。
- (三) 經濟については、何れの範疇に屬するとを問はず、特別協定を以て、指導國の指導下に綜合的に計畫し、且つ開發運営するべきである。
- (四) 内政特に宗教、文化等については、原則として各國の自律に委し、指導國と雖も妄りに干渉せ

す、たゞ廣域圏全體の見地から適宜に指導すべきである。

大體以上の如くである。併し圏外勢力からの干渉を排除し、廣域圏の自主安全性を防衛し、或は圈内の平和、秩序、治安を保持するためには、指導國の必要と認むる手段を妨ぐることがあつてはならない。特に圏内の獨立國に對する指導國の指導は、なるべく條約又は協定に基き、直接にはなく、間接に勸告乃至忠告の形式を以て行はるべきである。併し廣域圏全體の見地からする指導國の指導權は、廣域圏の本質上、條約乃至協定に明規せられたると否とを問はず、當然に前提さるべきものと考へねばならない。

指導國と構成各國との聯絡機關としては、圏内獨立國との間には外交使節、獨立保護國に對しては高等辨務官又は指導官等が考へらるべきであるが、かゝる機關による指導國と各國との個別關係のみを認むるか、それとも外相會議、内政連絡會議、廣域圏民族會議の如き、廣域圏全體の一體的會議機關を設置すべきかと云ふ事は、何れも政策技術の問題に屬し、各廣域圏の性格、發展段階等に依つて異なるが、廣域圏の形成過程に於て之を見れば、初めは多邊的な個別關係に依る方が、指導國の指導媒介を明確ならしむると云ふ點に於て有効と考へられる。即ち構成各國は個別的に先づ指導國と提携し、指導國の指導媒介を通じて相互に聯絡するのである。たゞ構成國相互の間にも、漸次に直接關係の生じ来るは當然であるし、又廣域圏全體が共同の運命と使命を自覺して、一體感を持つに至る事は、

寧ろ廣域圏秩序形成の理想なのであるから、一々指導國の媒介を経ざる關係も認められ、又一體的な合議機關の設置や、廣域圏全域を貫通する民族運動の促進等も、事態の進行に應じて當然に考慮されねばならない。但し、此等の傾向が進展して、指導國の指導媒介が没却せらるるに至れば、既に廣域圏の本質的姿が全く失はれると云ふ事を、特に忘れられてはならない。此の故にかゝる場合に於ても常に指導國の指導媒介の強靱な原理は、依然として堅持されねばならない。一々指導國の指導媒介を経ざる場合が成立しても、原理的にはそれは常に指導國の明示又は默示の承認によるものであるとし、一體的合議機關に於ても、其の召集、司宰、諸案準備等の權限が常に指導國に在るは當然である。

七

廣域圏の本質及び其の内部構成諸原則を上述の如く見來ると、それが在來一般の諸國家結合方式の何れとも異なる複雑な特質を有し、寧ろ此等の諸方式諸原理の否定の上に立つ新秩序たるべき事が理解せられるのであるが、それは又具體的に、過去に存在し、或は現に存在する。例へばローマ帝國、英帝國、モンロー主義、ソ聯邦等の何れと比較して見ても、明かに異なる所があるのである。今、世界史の上に大東亞共榮圏を載せて見る爲め、極めて簡單ではあるが、ローマ興亡史との比較論を試みるであらう。

先づ第一に、ローマ帝國は一つの「世界國家」として見られたもので、劃一的な統一主義の觀念を示す典型であつたのに反し、廣域圏秩序は、世界各地の獨自性と自主性を豊かに認めつゝ、それらをより高き全體に包攝せんとするものである。此處に既に兩者の根本的な相異が認められる。かゝるローマの劃一的世界帝國の統治形態は、必然的に征服と支配の原理に基く處の權力的帝王制を不可避としたのであつて、此の面に於て廣域圏が指導國の指導と、圈内諸國家の協同との關係に立つべきものであることに於て根本的に異なるのである。更に次の事實は注目されるべきである、即ちローマは抑々ギリシヤ的な政治原則と同じ原理に立つ所の都市國家から發足したもので、それが漸次に擴大せる結果、かゝる都市國家の形態を維持し得ざる限界に達し、其のために結局共和制を廢して帝王制に移行したのである。然るに此處にもかゝる政治原理の傳統は依然として存続した爲に、ローマ市民權、(それは既に眞の政治的意義を失つたものではあつたが)は幾多の段階を経て、紀元三世紀の初めには結局帝國内の全被征服民にも賦與せられる事となつたのである。其の結果、一方ではローマ帝國と其の屬領相互に同化作用が進行し、帝國內全市民がローマ市民としての自覺を持ち、ローマの光榮は即ち帝國內全國民の光榮と感ぜられ、ローマの運命を帝國內全國民が擔ふと云ふ事になつたけれども、他面では其の爲めに、元の征服者たるローマ其のものは其の獨自性を失つて、かゝる帝國の中に埋没せられ、後には高級軍司令官も、更には皇帝すらが元の被征服民中から現はれるに至り、ローマ自身は

其の名と其の法制とを此の帝國に残して、獨自の存在としては消滅し去つたのである。此の意味に於てローマは既に指導國としての存在を失つたのであり、此の面に於ても指導國の存在を其の本質的要因として成立する現前の廣域圏とは原理的に異なるものがあるのである。

併し以上はローマ帝國が窮極に於て辿つた結果だとしても、ローマが尙帝國の中心に位してゐた時には、世界的な權力的統一國家として、征服と支配の原理の上に立つたのであり、それが特に經濟生活の面に於ては搾取主義として現はれたのである。即ちローマ帝國は全體としての經濟に生産と消費との關聯と循環を可能ならしむる所の流通組織を缺き、ローマ都市の經濟産組織は單に奴隸農業に基くものであると共に、自らは工業生産をなさずして、帝國內諸地域から流入する生産物を消費する所のものであつた。かゝる諸地域がローマに其の生産品を賣つて得た貨弊は、結局再び租税としてローマに納入せしめられたのであつて、此等の關係も亦、共榮原則に立つ現前の廣域圏の經濟構成とは根本的に異なる處のものがあるのである。

以上述べ來つた處を要約すると、世界新秩序とは廣域圏が地球上に二つ、三つ、或は四つ並立してゐる形態を云ふのであつて、大東亞共榮圏は當に其の中の一つである。廣域圏に於ては必ず其の中に一個の有力なる指導國があつて主體をなし、此の主體國の指導に信從する限りに於て、廣域圏内の諸

國家と諸民族は其の傳統と自由と向上とが許される。而して主體國家の民族は其の智能に於て、徳性に於て優に被指導國たる圈内諸民族に範を垂るゝに足るものであらねばならぬ。即ち被指導民族の文化指導をなし得るだけの實力を持たねばならぬ。此の責任の重大性を知悉し、修徳實踐する處に主體國家としての品位があり、指導國民としての權威が圈内諸民族により認識されるのである。信淵の宇内混同に於ても之と同様な理論が徳川中期以降の世界狀勢に即して構想されてゐたのである。尤も彼に於ては其の時代が時代であつただけに、世界を幾つかに分けたる廣域圏の並立と云ふことは考へてゐなかつたが、廣域圏の一つたる大東亞共榮圏の内部的規模に關する構想は、確かに現代のそれと脉々相通するものがあるのである。

第三章 大東亞共榮圏の文化指導理念

次に大東亞共榮圏内の文化指導理念を取り上げるが、今や曾て東洋に侵入し、現に尙大東亞圏内に殘存せる米英文化の餘燼は早念に取り除かれねばならないが、然も、先づ大東亞共榮圏内の文化建設上、第一に考へられることは、既往に於てヨーロッパ文化がヨーロッパ以外の世界に擴大膨脹したと云ふ事である。

由來文化と云ふものは、それを創造せる民族の傳統に根ざすと共に、與へられた周圍の自然的及び社會的環境に適應せるとき初めて健全であり得るのである。そして今大東亞共榮圏内には當然此の圏独自の文化が建設されねばならない。此の事は宛もヨーロッパの文化がヨーロッパ外の地域に擴大して、全世界に其の頽廢的な機械文明を普及した徑路の内に醸成されたものである。それは丁度大英帝國が七つの海を支配して、全世界に亘る制覇を完成した約一世紀後の今日、内部的にも其の大英帝國を崩壊せしむ諸々の要素が、自治領の獨立化傾向として現はれてゐる事實に徴して判るのである。

即ちそれはイギリスを先達とするヨーロッパ諸國の亞細亞侵略と關聯し、或る意呼では近代ヨーロッパ文化を純粹化した文明國アメリカを含めて、大東亞と云ふ風土的且つ歴史的條件を異にする地域にまで侵入した事によつて、却つて此の地域の諸民族の文化創造力によつて反抗され、擊破さるべき運命に直面したのである。此の事實には歴史必然の勢と稱すべきものがある。斯くして此等の言ひ得る事は大東亞共榮圈文化建設の必然性は、米英等によつて代表される文化破滅の必然性と相表裏し、相交通すると云ふ事である。

第二には、かゝる共榮圈文化建設の必然性は圈内諸民族の文化的能力の優秀さによつて裏付けられてゐるを知らねばならぬ。文化の點に關しては、印度人の佛教文化や支那人の儒教文化がヨーロッパ文化に比して決して劣るものではないと云ふ事、更に我が日本文化が生成發展する永い傳統をもつと共に、佛教文化 儒教文化、更には近代ヨーロッパの科學文化を常に自然的に攝取して、此等を眞に自己のものに化し、世界に比なき多彩にして深淵なる文化を建設したと云ふ事實が認められるのである。勿論全體の傾向として見るとき、佛教文化や儒教文化は、彼の主として科學技術による近代ヨーロッパ文化が世界を征服したる力に比すれば遜色あることを認めねばならない。併しかゝる文化の比較がなす場合に忘れてはならぬ事は、文化の歴史性を無視することの誤謬である。佛教文化や儒教文化が近代的なものにまで發展しなかつた事に於いて注目すべき事は、かゝる印度や支那の固有文化につい

ては、所謂東洋文化の停滞性と云ふもの、存在を忘れてはならないと同時に、印度文化や支那文化の中に、近代的科學技術にまで發展すべき萌芽の含まれてゐた事實も否定出來ないのである。例へば支那に於ける製紙とか印刷術の發明とか、印度に於ける數字の零の發見とかが其の事實を物語るのである。唯印度や支那に於ける文化が停滞して發展を見せなかつた事が、米英に優先を與へたに過ぎないのである。併し我が國の文化に至つては、東洋に於ける唯一の例外として生成發展を遂げたのである。其の上、米英の文化自體に對しても、決して模倣のみによつて成立せるものではなく、古代ギリシャ、ローマの文化、ユダヤの豫言者宗教、更にアラビヤの數學技術の攝取によりそれが成立せる事は周知の如くである。かやうに考へ來るならば、米英文北が米英外の世界に擴大して東亞の地域にまで侵入して來たと云ふ事態は、文化そのもの、立場から云つても決して望まじきものとは云へない。文化の立場から云つても、米英文化は米英以外にまで擴大した事によつて、米英外の文化圏の強力な反抗に遭ふべき運命に逢つたのである。かゝる觀點からしても、大東亞諸民族が米英文化を自己の圈内から驅逐して、自己固有の文化を建設すべき必然性を持つと云ふ事が主張し得られるのである。以上の觀點によつて、大東亞共榮圈に新しき固有の文化が建設さるべき事が主張し得られると思ふが、尙ほ之に對して次の如き疑問が提出される事であらう。即ち成るほど大東亞諸民族が米英文化から解放されて、独自の文化を建設すべき事は主張し得たにしても、其の建設さるべきものが共榮圈文

化と稱へられるやうなものであるかどうかと云ふ事は是である。文化と云ふものは根本に於いて民族精神の所産であつて、それ以外のものではあり得ない。故にかうした共榮圈文化と稱ふるが如き、民族文化を超えた統一ある文化が建設されるべきであるが、それには若干の疑問がある、然も之は極めて重要な疑問であつて、此の疑問に對して答へられぬ以上、共榮圈文化と稱するものは否認され、たゞ諸民族特有の文化が建設されるべきだと云ふに止つて、文化的には何等統一性を持ち得ないと云ふ事にならざるを得ない。

斯くて右の疑問に對して解答が與へられねばならぬが、それに答へるに先立つて、明かにして置かねばならないのは、共榮圈文化と云ふ名の下に諸民族の民族的特殊性を除き去つて、單に抽象的な、そして諸民族の個性を含まぬ文化を考へてよいかどうかと云ふ事である。

斯る共榮圈文化の實質に關する問題は、更めて後に述べる積りであるが、たゞ茲に忘れられてならない事は、共榮圈文化の成立する可能性も其の建設されるべき必然性も、常に多邊的な意味に於いて與へられねばならぬと云ふ事である。

二

諸民族がそれぞれ独自の文化を作りながら、然もそれらが全體を通じて統一ある特色を持つと云ふ意

味に於ける文化圏は、これまでは、確かにヨーロッパに於て求る得た所のものである。イギリス、ドイツ、フランス、イタリア等がそれぞれ民族的個性ある文化を作りながら、然もそれを通じてヨーロッパ文化と稱ふべき明確な形態を認め得たるが如きも其の適例である。然らば、果してそれは如何なる根據より出てゐるか、其の由つて來る第一のものとして擧げ得る事は、地理的條件のそれである、ヨーロッパの地勢は、其の内に特に交通の障礙になるが如き大山脈もなく、唯一の例外たる大ブリテンが大陸から離れてゐても、これとて大陸との交通は極めて容易である。其の爲め早くからヨーロッパ諸民族間には交通が頻繁に行はれ、又諸民族間に絶えず交戦が行はれたとは云へ、之も結局は諸民族間の交流を促す所以となつてゐる。又近代ヨーロッパ社會は其の文化を作るに當つて、種々の異質的文化を其の傳統の内に取り入れてゐる。其の第一の例としては、舊教の豫言者宗教があり、第二には都市國を地盤とするギリシャ文化があり、第三には世界帝國を實現せる古代ローマの帝國主義があり、第四には中世のキリスト教文化がある。近代ヨーロッパ文化の成立を考へるに當つては、かゝる種々の異質的文化が其の重要な内容となつてゐる事實を認めねばならない。かやうに考へるならば、近代ヨーロッパの世界にまで擴大するほどの力を持ち得た一面の原因として、異質的民族要素を相互に媒介して統一あるものとした事實を、茲に指摘せねばならない。かゝる異質的なものを相互に媒介し、之を通じて統一を實現することこそ、文化の發達を促進する最大の要因があると考へられた

のである。

近代ヨーロッパ文化の成立条件が右の如きものであつたと考へられるならば、かゝる統一ある文化圏が成立する爲の基礎条件は、少くともアジアに於てはそれが認められ得なかつたと言はざるを得ない。即ちまづ第一の前提条件たる地理的条件が缺けてゐた。東アジアに南洋の諸民族をも加へて構成する處の大東亞共榮圏の成立地域には、諸民族を隔離する地理的条件はあつたが、それらの諸民族を相互に接觸さすべき地理的条件に缺くる所であつた。此の地域に於いて優秀な文化を建設した三個の優秀民族たる日本人、支那人、印度人との間に或る程度の文化的接觸はあつたにせよ、それはヨーロッパに見られたやうな文化の交流と稱すべき性質のものではなかつた。印度と支那とは夙に高山と高原とによつて隔てられてゐて、兩者間に密接な交通乃至接觸の行はれる途は見出せなかつた。東洋西洋兩間の最も早い交通は先づトルキスタンと中央アジアとによつて、次いで支那の西北方と印度西方との間に行はれたが、それは併し印度人若しくは支那人の自發的な意思によつて直接的に行はれたものでなく、寧ろ兩者の間に介在してゐた他民族の活動による接觸であつた。アジア大陸から大海水を隔てて存在する日本と支那、況んや日本と印度との交通が如何に局部的なものであつたかは、既に知られる所である。更に南太平洋に散在する諸民族間の交通に至つては、茲に取り上げる迄もない。其の上アジアにせよ、大東亞の地域にせよ、之をヨーロッパの地域と比較すれば、實に廣範圍に亘るもの

であり、況んや大東亞共榮圏の範圍に至つては、寒帯地方から熱帯地方までも含みつゝ南、北に長く延びた地域である。かゝる地理的、氣候的条件の爲に、大東亞諸民族間の密接な接觸は過去に於て實現せられ得なかつたのである。

勿論大東亞諸民族相互の間に全く無交通と無接觸があつた譯ではないが、ヨーロッパ諸民族相互間に夙に成立したやうな交通接觸が行はれ得なかつたのである。然も右に述べた如き地理的、氣候的条件を或る程度無視して、相互に交通接觸が行はれ得るまでに大東亞諸民族中の若干民族の文化が發達した時には、既に歐米諸國のアジア侵略が開始されてゐたのである。其處に東洋に於ける彼我文化の交互的錯雜が將來の禍根を植え付けたのである。

併し乍ら、大東亞民族の間には、固より人種的、風土的な親近性に基いて、何等か共通の生活態度又は物の考へ方が存在した事は事實である。かゝる共通性は唯相互に獨立する諸民族の文化の特殊性を一應觀念の外に置いて、共通的特質のみを表面的に強調する事によつて初めて成立し得るものであつた。かゝる意味に於いて、ヨーロッパ文化即ち西洋文化に對立する對等の意味での東洋文化とか、アジア文化とか云ふものは嚴密的には過去に於て存在しなかつたと云へるであらう。

先覺者岡倉天心は曾て「東洋は一なり」と提唱したが、彼の言は、本來一であるべき東洋が餘りにも統一性を持たぬ事態を慨し、此の主張によつて本來東洋民族の持つべき理想を喝破したものと

の強い言葉であつた。更に又過去に於て日本人が遠く南方の僻地にまで發展して行つた事實を忘れてはならぬが、それは極めて部分的な現象であり、然も一時的なものでしかなかつた。今から三百年以前にも、南洋に日本人町が出来てゐたと云ふやうな事實は、日本民族の進取的發展の素質を物語る一斑ではあり得ようが、かゝる極めて局部的な事實を捕へて、過去に大東亞諸民族間の密接な交通接觸が在つたと立證する事は固より許されない。斯くして言ひ得る事は、大東亞諸民族が緊密な相互接觸を保つて、大東亞共榮圈文化とも稱すべき統一ある文化を建設するのは、實に懸つて今後の課題であると云ふ事である。

三

西洋文化に對して東洋文化と云ふ語が近年普通に使用され來つた事は、之を如何に解すべきであるか。既にかゝる語が使用され、然も此の東洋文化なる語によつて西洋文化に非ざるものゝ特質を考へ來つた事は、過去に於て一種統一ある獨特の文化がアジア乃至大東亞に成立してゐた事を示すものと言へないだらうか。かゝる疑問に對しては、元來東洋文化と云ふ語は主としてヨーロッパに於ける西洋又は西洋文化から、東洋的なものを區別すると云ふ意味に於て使用されて居つたと云ふ事實を指摘したのである。然も此の東洋と云ふ語は元來は、アジアの意であるが、往々アジアの東部或は又近

年では單に日本の意と云ふ風に轉用され來つてゐる。然し乍ら、此の東洋又は東洋文化と云ふ語は、特に日本人の間に積極的な意味を以て語られてゐたものであることを想像してよいのである。即ち「東洋は一なり」とか、「東洋の平和」とか云ふ語が示す如く、我々日本人は過去に於て既に西洋に對立せる意味での東洋を考へ、又かゝる東洋の發展向上を所期し來り、それへの努力を拂ひ來つた事は注目すべき事實なのである。かゝる意味に於て實に日本なくば東洋もなく、大東亞もなしと云ふ民族的信念が燃えてゐたのであつた。

斯くて東洋乃至大東亞の概念は、東洋全體の諸民族間には其の地理的條件を主原因として認められてゐなかつた事は先に述べた如くであるが、唯ひとり日本に於てのみ、印度の佛教文化と支那儒教文化との一方的な攝取が行はれ、日本の内部に於ては、印度や支那のかゝる異質的文化が日本固有の文化と相互に融合し合ふ事によつて、不思議にも渾然統一ある日本文化の形成を見たのである。極言すれば、斯くて生れた文化は日本固有の文化たると同時に、東洋文化其のものでもあり得たのである。印度文化や支那文化が、所謂東洋的停滞性を示して、其の中に眞に發刺と稱せられるものが見られなかつたのに反して、我が日本文化のみは不斷に其の内に異質文化を取り入れ、夫等の相互媒介を通じて統一ある文化を形成しつゝ、限り無き日本文化の發展を見せたのである。日本文化のかゝる特性は、今後の大東亞共榮圈文化の建設に當つて、日本人が其の指導的地位に立ち得る資格を有體に示すも

のである。更に又かゝる日本文化の特性を一層よく示すものは、近代ヨーロッパの科學文化に對する日本民族の態度である。一般に言はれる如く、明治以降見られた所の歐米の科學技術の移植と、それに伴ふ機械文明の渡來は、日本文化をして部分的には不健全なる様相を示すものたらしめたけれども、併しそれは表面的事實に過ぎず、内面では日本民族的自覺と其の傳統的精神とは、かゝる表面上の危機を乗り越えて、西洋文化の吸収同化を力むる間にも、日本文化の健全性を常に維持し來つたのである。然もかゝる歐米の科學文化に對して、日本民族は東亞諸民族中唯一の例外的な存在として、積極的に之が攝取に努めたのである。かゝる積極性は、今次大東亞戰爭に於いて我が同胞が赫々たる戰果を擧げ得た事の内潜む原因の一として、認められる所である。

斯く觀じ來る事によつて、何故之まで東洋乃至大市亞の諸民族が、ヨーロッパ文化圏に比すべき統一的文化圏を構成するに至らなかつたかの原因の所在が一應理解せられると共に、一面又大東亞の諸民族が、必ずしもかゝる文化圏を形成する資格を缺くものではなかつたと云ふ事も同時に理解されるのである。かるが故に、大東亞の諸民族は、これまで一の文化圏を形成するについて障礙となり來つた諸條件を除去されるならば、統一的な大東亞文化圏を立派に形成する可能性を有するものと稱し得るのである。然らばかゝる文化圏の形成を阻害し來つた條件は、今果して除去されんとしてゐるであらうか。

先づ其の第一は地理的條件のそれである。過去に於て大東亞の諸民族を孤立せしめ、其の相互間の緊密な交通又は接觸の成立を阻害し來つた第一の條件は既に見た如く、其の自然的地理的條件であるが、今や此の阻害條件は殆んど除去されたと見る事が出來よう。科學技術の發達がかゝる役割を荷負ふのである。汽車、汽船、自動車、航空機に始まつて無線電信、ラジオ、印刷術、寫眞技術等に至る科學技術の發達は、曾つて交通又は相互接觸の障礙となつてゐた地理的條件を殆んど除去し去つたのである。然も其の上、第二の阻害條件と考へられる歐米諸國の帝國主義的支配權にして驅逐されるに至らば、大東亞諸民族相互間には緊密な交通接觸が行はれる事になつて、茲に大東亞文化圏の形成さるべき物質的條件が與へられる事になるのである。況んや、これら民族間の交通が頻繁に行はれ相互接觸が緊密化するならば、圈内地域間の物資は自ら相互に流通し、又人的交流も旺んになつて、其處に自ら共通文化の建設意欲が發生するであらう事は、察するに難くないのである。

併し乍ら、大東亞文化圏が形成されるためには、右の物質的條件のみでなく、更に精神的條件も併せ考へられねばならない。然らばかゝる精神的條件とは何かと云ふに、右の物質的條件が新に備はると云ふ事は、大東亞民族をして、其の現實の生活面に於いて一體となるべき感情的結合の基礎條件が與へられた事をも意味するのである。然も彼等が米英蘭等の帝國主義的桎梏から解放されて、民族的自覺を取戻し、然も現實の生活面に於いて自己本然の在るべき状態を見出すならば、東洋諸民族の指

導者たる我が日本を中核として、其處に共通の運命を打開せんとするの決意を有するに至るであらう。大東亞共榮圏とは元來物資の有無融通を圖る事によつて、自給自足的經濟を營む所の、單なるブロック經濟圏ではなく、それ以上のものたるべきは固より論を俟たぬ所であるが、諸民族がかゝる運命的一體感を持つ事によつて、初めて大東亞共榮圏の基礎が眞實に鞏固なものとなり、斯くて自らの文化的一體感が濃厚になるであらう。大東亞文化圏と稱すべき統一ある文化圏が形成される事が、單なる可能性から現實性の問題にまで發展する爲には、かゝる運命觀を通じて、諸民族間に文化的一體感が漲る事を前提とするのである。

四

既に一言せる如く、大東亞共榮圏の文化は一方に於ては各民族の個別的特別性が其の内に生かされると同時に、他方に於てはそれ自體が大東亞共榮圏全體に通ずる共通性を持つ事を必要とするのである。然も茲に言ふ所の共通性とは、決して特殊な差別相を一切没却して各特殊の個別性を越えた一律的觀念としての共通性を意味してはならない。それは、各特殊の個性をそのまゝの姿で充分生かしながら、然も夫等の個性を通じて一つの統一を實現するが如き普遍性を考ふるものである。かゝる普遍性にして初めて謂ふ所の大東亞共榮圏文化の持つ普遍性たり得るのである。此の事は恰も一個の

家族が其の内に夫々の個性を持つ所の成員から成り立ちながら、然も家族全體として、諸成員の個性を貫く共通性を持つと云ふ事情と類似してゐる。或は此の場合又日本の文化と云ふものを考へて見ても、それが諸外國の文化と比較して明かに一つの特色を、共通的内容に於て示しつつ、實は其の内に各地方々々の個性が充分生かされてゐる事實に於ても、其の事情を窺ひ得るのである、かくて大東亞共榮圏の文化は、其の地域内各民族の個別的特別性に應じて夫々個性に富み、然も全體として統一ある特色を發揮すると云ふ所に、初めて其の豊かなる體系を實現し得るのである。

斯くして、其の内に特殊性を含みながら、全體として普遍性を持つると云ふ事が總ての文化の健全な在り方であり、之に反して、或る文化が全體として統一ある普遍性を有しながら、然も其の内に含まれる諸部分の特殊性の存在が許されないやうな場合は、其の文化は極めて不健全なものたらざるを得ない。過去に於ける大東亞に於ける米英文化の在り方は、當に其の典型であつたと云へよう。即ち米英文化が大東亞の諸地域に侵入し、其の地域の風土及び民族の特殊性を全く無視した文化を強要する事によつて、此の地域の民族の大部分が單に米英文化を模倣せる輕薄なる植民地文化を形成するに至つた事は既に知る如くである。又其處には、マニラ、シンガポール、香港、又は上海の植民地文化の輕薄さを指摘し得るであらう。更に遡つて古き歴史に其の例を求めらば、ギリシャ文化の時代からローマ時代にかけて見られた所謂世界帝國主義の文化さへ考へる事が出来る。此の時代が即ち個

人主義、世界主義、快樂主義等を生んだ時代であり、然もこれらの文化が各民族の民族的自覺の喪失と、民族性を無視せる世界帝國成立の所産であつた事は、明かに歴史上の事實として、人の知る通りである。

共榮圈文化が、かゝる意味に於て眞に健全にして豊かなる姿を實現するものである事は、そがあるべき絶對的な姿であつて、然も大東亞戰爭を遂行する我が日本民族の民族的決意と精神的傳統とが、共榮圈文化の斯る構成を必然的なものとして要請するのである。即ち、各々其の處を得せしむる八紘爲宇の日本精神と、其の具體的發現としての大東亞戰爭への決意とは、大東亞民族をして米英等の侵略主義文化から解放せしめ、夫々の民族に民族的自覺を興へ、其の民族的傳統を眞に生かしつゝ、發展せしむる事を目標とするものであるからである。斯くして、大東亞戰爭は、決して諸民族のヴェルサイユ體制が企圖して單なる民族解放を目指すものではなく、日本民族の哲學の下に諸民族を共榮圈内へ解放し、各民族の特殊性を生かしつゝ、然も全體としては統一ある文化圏を建設すべき事を所期しつゝあるものと言ひ得るのである。之を言ひ換へるならば、建設さるべき共榮圈文化とは、單に一方的な日本文化の移植でもなく、而も土着文化尊重の美名の下に行はれたオランダ政府流の放任政策でもなく、それは日本民族指導の下に各地域の民族的傳統を生かしつゝ、新しき統一ある文化を建設すると云ふ態度によつて形成さるべきものなのである。従つてかゝる文化は、日本民族を指導的中

核として、各民族文化を發展向上せしめると共に、更に各民族文化の相互接觸、相互交流を通じて、一つの全體的統一文化の建設に諸民族が協力すると云ふ所にこそ成立するのである。

五

既に明示せし如く、共榮圈文化は各民族文化の特殊性を生かしながら、然も全體として統一ある文化として形成さるべき必然性を持つのであるが、此の場合、其の全體としての統一を基礎づけるものは何處に求められねばならぬであらうか。諸民族が運命的一體感を以つて協力するとしても、若し根本に於いて各民族が自己の獨自性を固執するならば、一時的には諸民族の協力が見られても、共榮圈と稱するが如き眞に鞏固なる統一體を形成する事は所詮困難であらうが、況んや茲に云ふ共榮圈文化の形成と云ふが如き事は到底望み得られぬであらう。共榮圈文化が各民族文化の特殊性を通じての統一性、普遍性を持つが爲めには、先づ其の依つて來る所の基礎が興へられねばならない。然もかゝる統一性の基礎たるものは、大東亞諸民族の民族的性格其のものうち求められるのである。今此の事に關し、先づ大東亞諸民族中の最優秀分子なる日本人、並びに印度人、支那人の民族的性格について考へて見る事にする。

先づ印度人に就いて考へてみるに、之は血統上アリアン系統に連ることによつて知れる如く、可成

り理知的であるにしても、同じアリアン系のギリシャ人の如く合理主義ではない。何故かと言へば、ギリシャ人は思想的立場からして飽くまでも「有の立場」に立つてゐるに反して、印度人は「無の思想」の上に立つてゐるからである。印度の宗教思想は、一言にして之を言へば「無の思想」だと稱し得る、例へばブシマ教の神は萬物を超え萬物を包むと共に到る所に遍在する神である。それ故に、かかる神の信仰を中心とする印度宗教思想は、一切の存在の相對性を自己の内に含み、然も之を超越する絶對無を究極の實在とするものと稱する事が出来る。之を同じアリアン人種たる古代ギリシャ人の哲學思想と比較するならば、所謂東洋的なもの、特質を明白ならしめ得るであらう。

次に支那は、印度人の如く理知的であると云ふよりは實際的であり、實踐的である。古代支那に於て最も尊ばれたものは儒教である。此の事は、宛も形に捉はれ、形を尊ぶやうにも見られるが、併し儒教の中心概念の天と云ふ思想は、一面に於いて無の思想に通ずるものである。それが老莊の思想たる道の考へに至つて無の思想となつたのは言を俟たない。謂はゞ支那人は、印度人の理知的、思想的態度の代りに、實踐的態度に於て無の思想を表現してゐると考へる事が出来るであらう。無爲とか、無我とか、或は天命とか天道とか云はれるものを重んずる態度には、やはり絶對無を究極の實在とする考へ方が支那思想の背後に在るのである。

然らば日本人にあつてはどうかと云ふに、それは印度の宗教や支那の道德の如き明確な體系は持た

ないが、これら諸國の宗教思想や道德思想を常に攝取してゐるばかりでなく、更に歐米の科學文化をも積極的に攝取して、然も常に自己を失はない態度は、無の立場に徹せるものと云ふ事が出来る。日本民族の滅私の精神と云ふのは、自己と云ふ人間存在の相對性に捉はれないで、絶對無の實在に合一すると云ふ態度に依るものと云ふ事が出来る。而も印度や支那に於ては、文化が停滯して發展を見なかつたのに反して、日本に於ては文化は常に生成發展して止る所を知らず、然も常に自己の本然の姿を離れないと云ふ事は、かゝる無の立場に立つて、然もそれに徹せるものと考へられるのである。

斯くの如く考へ來るならば、日本、支那、印度と云ふ大東亞に於ける三大民族は、絶對無の立場を採る點に於ては共通性が見出されるのである。然も、米英人と東洋人とを比較して明確な相違は其の自然に對する態度である。米英人にあつては、大體、人間と自然とは對立するものと考へられ、自己即ち人間の存在を中心として自然を考へようとする態度が見られる、従つて其處に、自然を征服し之を克服しようとする態度が出て來る。此の事は彼等の生活態度や社會的慣習のすべてに現はれてゐる。即ち米英人の家屋は、自然から隔離し、其の中に凡ゆる人爲的設備を施す事を以つて成り立つてゐる。然るに東洋諸民族の生活態度は、自然の脅威を防止すると云ふ事も固より考へぬではないが、寧ろ自然の中に入つて生活すると云ふ形である。家屋の構造にしても、よくそれを現してゐる。之が即ち思想的には、佛教に於ける空とか無とかを眞實在と考へて、之に合一せんとする考へ方となり、

之が道德的には、天道、天命に従ふとか、無爲にして自然に化すると云ふやうな態度となり、又無我滅私を尊しとする態度となつて現れるのである。之は、南方に於ける未發達の諸民族の素朴な生活態度についても一般的に云い得る所であつた。かう云ふ點に東亞諸民族の生活態度乃至世界觀の共通性を認むる事が出来るのである。

斯くの如く、有ではなく、無を絶對的なものとする立場と、自己を主張するのではなく、天に従ひ自然に合一せんとする立場の中に、大東亞諸民族の文化がそれぞれの特殊性を持ちながら、然も統一を保ち、共通性を發揮し得る所の基礎が存在すると考へられるのである。かゝる自然的素地の上に、更に大東亞戰爭開始以來の運命的一體感が鞏固に打ち樹てられるならば、其處に大東亞諸民族文化の統一性の基礎が根強く與へられる事になるであらうと考へられる。

六

大東亞共榮圈文化が統一性、普遍性を持つと同時に、それが民族的差別、風土的な多様性に應じて夫々特殊性を持つべき事は、既に縷述せる如くである。

共榮圈が南北に長く連つて、其の中に寒帯、温帯、亞熱帯、熱帯の多様な地域を含み、氣候風土等の條件を夫々異にするものである以上、同じく共榮圈文化として統一性を持つにしても、其處に自

ら多様性を持たざるを得ない。固よりかゝる自然的條件を過大視して、其處から文化の特殊性についての決定論を引き出す事は慎まねばならないが、併しかゝる自然的條件を全然無視して文化を考へる事は、是又固より不可能である。其の自然的條件から考へても、共榮圈文化は特殊性を含んだ普遍性を其の基底に持たざるを得ないのである。例へば、同じ文化の中でも、緻密な思索を必要とするが如き學術研究などは熱帯地に於ては充分に行はれぬのであつて、之は温帯地を最適地とする。之に對して、音樂、舞踊の如き疎慢な思索は、綿密な觀察を必要とせず、寧ろ自然的感情の要素を多く必要とするものは、熱帯地に於ても發達し得る。然も亦文化の或る一種類のものでも、氣候風土によつて其の表現の仕方が自ら異なる事もあり得る。例へば建築を取つて見るに、寒帯と熱帯とでは自ら其の構造様式を異にせざるを得ないのである。

併し乍ら、かゝる自然的條件は或る意味ではさほど絶對的なものではなく、或る程度までは其の條件を輕視する事が出来る場合もあり得る。自然的環境の相違よりは、寧ろ各民族の持つ人種的、傳統的相違性の方が、文化の創造にとつてより大なる影響を持ち得るものと考へられる。殊に此の點は前述せる所の、各民族の慣習傳統を生かすと云ふ共榮圈建設の本來的な意圖にも關するものがあつて、かゝる民族的特殊性に相應じて、其の個性性を充分に生かす事によつて、却つて全體としては深い統一の紐帶を持つ處の文化が形成される可能性があるのである。殊に優秀な文化は、常に民族的傳統の

豊かな民族によつて作られる事を思へば、かゝる民族的特殊性を無視せぬ事が、文化建設の要諦たるを知るのである。此の事は又、文化の創造作用其のもの、本質からしても考へられる事である。

凡そ文化の創造と云ふ事については、或る一個の獨創的天才にのみ俟つものだと云ふやうにも考へられるが、さうでない場合もある。勿論、藝術上の或る新しい様式を作り出したり、學問上の或る新しい發見が行はれたりするのは、確かに或る天才の出現を俟たなければならぬ。併し乍ら、其のやうな天才と云はれる藝術家なり研究家なりが、其の天才の名に値するだけの才能を發揮するに就いては、廣い意味に於いて、さやうな環境が其處に與へられて居なければならぬ。即ち或處に、彼に影響を與へた所の精神的物質的環境なるものが考へられようし、然もかゝる事が、彼の置かれた社會的状況と、それを通じての歴史的傳統を無視して考へられぬ事は言ふまでもない事である。かゝる見地よりすれば、文化の創造に於ては、かゝる民族的傳統なるものが大きな役割を持つ筈である。併し、文化の創造は單に過去の傳統に追従し、それを保持する立場からのみは生れないのであつた。そこに過去の傳統が現在に於いて生かされると云ふ事が要請されねばならない。従つて大東亞民族が民族的傳統を尊重すると云つても、其の事は決して單に過去の形式的傳統を固執するとか、況んや固陋なる困弊に捉はれる事を意味するものであつてはならない。大東亞諸民族は夫々自己の民族的傳統を尊重すると共に、それが常に、新しく與へられた共榮圏建設と云ふ偉大なる運命の内に、廣く生かされて

ゐる事が必要である。

共榮圏文化が特殊性を含むと云ふ事は、決して各民族が夫々孤立した民族として各自の民族文化を誇ると云ふ形で示されるものではなく、各民族が大東亞共榮圏内の一員としての自覺に於いて、各自の民族文化を生かすと云ふ事ではなくてはならない。謂はゞ各民族は、自己の民族性を自覺すると共に、又大東亞共榮圏内の一員としての自覺の上に立たねばならないのである。かゝる自覺を持つならば、其の創造する文化も自ら民族的特殊性を持ちながら、然も大東亞共榮圏文化たる普遍的特性を持ち得るのである。斯くして、各民族の文化的特殊性が充分に發揮される事は、同時に大東亞共榮圏文化が全體としての健全なる特殊性を以つて、豊かな統一體系を建設する事をも意味するものではなくてはならない。

七

既に述べた如く、共榮圏文化に於ては各民族の特殊的能力を認め、又自然的條件を考慮に入れて各民族文化の特殊性を尊重し育成し行く事が必要なのであるが、併し此の場合に強調されねばならぬ事は、各民族文化の特殊性を尊重すると云ふ事が、飽くまでも共榮圏文化と云ふ一の統一ある全體の中に於ける特殊性としての存在であると云ふ事である。それが單に各民族の恣な文化的意欲に放任さ

れて居るものとすれば、所謂共榮圈文化と云ふが如き統一ある一つの明確な性格を有する文化は形成されぬのである。つまり、各民族の民族的特殊性、即ち夫々の特殊な才能、夫々の傳統や習慣、夫々の置かれてゐる自然的條件、それらの諸條件から生ずる文化的特殊性が容れられると同時に、他方に於ては、共榮圈文化として在るべき明確な性格が夫々の特殊性を通じて發現される事が必要なのである。従つてかゝる文化建設の場合にも徒らに自由放任を許すのではなくして、共榮圈の中核たるべき指導國の文化的指導力と、各民族のそれへの協力とが必要とされるのである。

斯くて共榮圈文化の建設に當りても、其の建設の方途として、指導者原理が採用されるべき必然性を有するに至るのである。即ち、大東亞諸民族の盟主たる日本民族が、自ら文化建設の指導的立場に立ち、他の諸民族は此の指導者の指導に服従しつゝ、其の與へられたる方向に協力して行く事が要請されねばならない。従つて、各民族の民族的特殊性を認めるとしても、それが明かに共榮圈の目標とする所に背馳したり、共榮圈文化の性格と相容れざるが如き文化的要素は、排斥されねばならない。但しかゝる場合に於ても、各民族の慣習や傳統、殊に宗教上の習俗の如きは、出来る限り寛容な態度を以つて臨むべきである。併し乍ら夫等の慣習や傳統が、凡そ共榮圈文化の理念に一致せぬ如きものであるならば、教育其の他の宣傳啓蒙等によりさほど刺戟を與へぬ程度に、徐々に除去するやうに努むべきである。茲に注意すべき事は、文化の建設、就中高度の精神文化の創造と云ふ事に關しては、徒ら

に禁止したり拘束したりする手段を用ひる事は餘り效果的でないと云ふ點である。文化が精神的なものであり、高度なものであればある程、其の建設には人間の自發的精神の作用が殊に必要となるのであつて、それは決して追従を強いたり模倣を強いたりする事によつては成されないものである。其の爲めには、單に一定の方針の下に啓蒙し、教育するだけでは不充分であつて、それには結局、日本人自身自らの手によつて、共榮圈文化の性格を最もよく實現せる文化を創造する事が必要とされるのである。凡そ民度の低い民族が、自己より優秀な民族と接觸すると、それを模倣しようとする働きが起る事は、多くの人類學者の指摘せる所であるが、文化對策の場合には殊にかゝる民族心理を利用すると云ふ立物が必要とされる。殊に大東亞戰爭を通じて日本民族の軍事的政治的、經濟的、優秀性が遺憾なく發揮された今日、未發達乃至劣等民族にはかゝる優秀者への模倣欲が起り得る筈であるから、之が模倣作用を利用して、日本人自身の手になる理想的な共榮圈文化の性格を彼等に體得させる事が望ましいのである。勿論其處に、宣傳や教育が不必要だと云ふのではない。他方では宣傳や教育の方法によつて、理想的な共榮圈文化の性格をば彼等に知らしめようと努力する事が肝要なのであつて、云はゞ、かゝる二つの方途が併せて採用されねばならないのである。

斯くて要するに、共榮圈文化建設の對策としては、指導者原理が採用すべきであるが、此の場合の指導者原理とは、單に日本人が指導者として指導の任に當り、他の諸民族は此の指導に服従すると

云ふ關係のみから成り立つものではない。併し固より右の如き指導と悦服と云ふ關係も含まれねばならぬのであつて、かゝる關係がなければ共榮圈文化と稱する如き新しき偉大なる文化が、一定の理念を旨指す計畫に従つて建設されるとは考へられぬ。即ちかゝる觀點よりすれば、日本人は云はゞ文化的な企畫者として、共榮圈全體の文化建設についての企畫を建て、其の企畫の實現について他の諸民族に指令する役割を果さねばならないが、それだけであつてはならないのである。それは、他の問題に於いてもさうであるが、文化建設の如き人間精神の自發性に俟つ所多き問題に關しては、特に外からの指令や命令のみでは眞目的を達することが出来ぬからである。然も、假りに指令が受取られ、命令が遵守されたとしても、服従者側の内面的な協力、自發的な活動がなければ、それは單に外形だけの事にすると考へられる。

然らば如何にすれば服従者側の内面的な協力が得られるのであらうか。其の爲めには、日本人が單に指導者として企畫し、命令し、指導すると云ふだけではなく、更に日本人自らが他の諸民族に對して、模範としての尊敬の對象たるべき資格を備へる事が必要なのである。即ち日本人は道義的にも圈内諸民族の師表となり、更に圈内諸民族の尊敬を集めるだけの文化を、學問上にも、藝術上にも、自らの手で作り上げる事によつて、文化的に圈内諸民族の模範者となる事を要するのである。斯くしてこそ、初めて指導國の指令とか命令とかが眞に徹底して、其の目的を達成し得ると考へられる。

かやうにして、共榮圈文化の指導原理に於ける指導者は指導者たると同時に、常に垂範者でなければならぬ。其の指導者にしてかくの如き有徳者であつてこそ、初めて眞に諸民族の指導者としての絶對的な權威が與へらるゝのである。此の意味に於て、指導者原理に於ける指導と悦服との關係は權威に基く指導と權威に對する悦服との關係でなければならぬ。而して、共榮圈文化建設の前提は日本人自身の文化創造力の活潑化と其の優秀化とにある。即ち、江戸時代の文化の一部に見られるが如き、島國的低級趣味を脱却すると共に、明治以後日本社會の一部に浸潤せるやうな物質文明の弊を一掃して、日本本來の剛建にして雄渾なる精神に基く新文化を、日本人自ら體得し、それに基づいて建設する必要があるのである。共榮圈内諸民族への文化指導は、日本人自らかゝる建設を行ふて後始めて施さるべきものと考へられる。

八

既に述べた所の、共榮圈文化の多様性、或は普遍性を有する特殊性と云ふ事は、共榮圈内諸民族が自ら置かれた所の自然的環境から發する所のものである。併し乍ら、日本人が指導的地位に就くと云ふ事は、決してかゝる自然的環境の條件から説明する事は出来ない。云ひ換れば、日本文化が共榮圈文化の建設に當つて絶對な權威を持つものとして見做される事は、單に其の自然的環境から發するも

のではないのであるが、其の事は如何にして説明するべきであらうか。

惟ふに、共榮圏に於ける指導原理は、共榮圏成立の原理として考へられる一つの歴史性の上に立つものである。

圈内の諸民族は、過去の歴史的條件の相違に基く所の夫々異つた傳統と歴史とを有する。かゝる諸民族の歴史的特殊性の上に、指導者原理の確立が必要とされるのである。諸民族が其の歴史的發展段階を異にする事によつて、道義的にも文化的にも、夫々諸民族間に差違を生じ、發達程度の極めて高い民族がある反面に、其の極めて低度なる民族も又在り得る。指導者の任務は、高度に發達せる民族の文化水準を、より、高きものに築き上げ、其の反面發達程度の低き民族に對しては、其のより、高きものへの完成に努むると云ふ所になければならない。其處に指導國が矜持する有識有徳なる指導者の存在が明からかにされねばならないのである。

而して指導者としての日本民族の歴史性を考ふるならば、日本民族は世界に比類なき國體を維持し文化的には不斷の生成發展を遂げ、其の肇國の大精神は自ら世界に類なき道義國家を形成し來つてゐる。かゝる歴史的發展に於いて日本民族は實に共榮圏に於ける指導者として、道義上、文化上の權威を持ち得るのである。かゝる日本民族を中心として、圈内諸民族の進化の方向が決定されねばならないのである。

共榮圏文化は、一方に於ける地理的、人種的條件に基き、又他方に於ては歴史的、社會的條件に基いて、個々民族の特殊性を含むとは言へ、諸民族の文化建設の方向は指導國を中心として一點に集中せられ、かゝる意味に於ける同化統一の傾向を辿るものと考へられる。固より共榮圏文化が統一化され、同化されると云ふ事は、惟ふに向後遙かに遠い將來の事に屬するが、日本文化の指導的創造發展の方向は、少くとも共榮圏文化の歸一すべき同一方向を示すに足るものでなければならぬ。

共榮圏文化の統一性乃至普遍性は、常に指導國たる日本文化を通じて顯現される。固より文化と云ふものは、其の建設者の環境其他によつて夫々特殊な性格を以つて現はれるのであるが、併し、常に一定の時代、一定の社會、或は特定の流派や學派と云ふが如き制限内に於ける文化の相互的發達は常に或る意味での共通性を以て現はれる。彼の一般に一つの型、一つの類型、一つの様式と稱へられるものが即ちそれであり、又場合によつては、それが時代精神、民族精神などとも呼ばれるであらう。其の型乃至類型、様式と稱へられるものは必ずしも個々の特殊性を其の内に認めぬではないが、併しかゝる一定の様式なり型なりが嚴存する限り、一つの規範又は拘束性が、其處に伴ふのである。

日本民族が文化を創造し、他民族の文化的方向が其處に結集されるについては、其の文化が一つの類型乃至型を實現する事が必要である。而して共榮圏全體としての文化が、一つの統一を持つ爲には、其の文化がかゝる類型乃至型を夫々の特殊性を通じて實現して居らねばならない。かゝる類型

乃至型が實現する限り、共榮圈内に於て種々な民族的特性が含まれるとしても、共榮圈外の文化に對しては、明かに一つの特徴を發揮する筈である。共榮圈文化乃至は大東亞文化と稱へられるものは、それぞれ文化の種々相を通じて、かやうな一の類型を示す所のものであると考へられるのである。

以上述べ來つてゐることを要約すると、大東亞共榮圈内に於ける文化政策としては何處までも圈内諸國家並に諸民族の完教、風俗、傳統其他の生活様式を尊重し、彼等の日常生活に急激な變化を來さないやうに留意し、然も其の宗教、風俗、傳統の踏襲は飽までも主體國家の指導に信從する限りに於て之を許すべしと云ふのである。而して從來米英等の資本主義帝國が専ら本國の便宜よりして植民地の原住民を暗愚に残し、其の文化水準を故らに低位に置きたるを改め、今次大東亞共榮圈内諸地域の原住民には成るべく早く科學的並に文化的教育を施して、彼等をして經濟的にも精神的にも幸福なものにしてやらねばならぬと考ふる處に、信淵の意圖した宇内混同秘策殊に彼が晩年に叫んだ存華挫狄論の一端と相通するものがあるのである。皇祖天神の聖徳を圈内諸地域の人民に光被せしむるの必要性は、古今を貫く皇國日本の渝らざる精神であることが、之によつても判るのである。

第四章 大東亞共榮圈の農政理念

次に大東亞の農業政策は、先づ日本本土の農村を維持し、育成し、此の事實の上に立つて外部的存在たる大東亞圈内諸民族の福祉増進を目標としてすべきであるとする現在智識層の意見を紹介する。

一 偕て大東亞の地域は亞寒帯と溫帯と熱帯とに亘り、且又濕潤な海洋性の地域もあれば乾燥した大陸の地域もあり、或は又廣潤な河川流域の所もあれば、山嶽重疊とした所もあり。氣候風土が多様なる爲め、各種の農産物が豊富に作り出されてゐるのみならず、大東亞には勤勉なる農民が幾億も生存してゐるから、自己の必要なる以上の農産物を低廉な勞働力の存在並に栽培加工技術の進歩、農業資本の投資等の條件が備はらねばならぬことを考へるなら、大東亞民族以外の地域で容易に栽培できぬことが分るであらう。それ故、從來の歐米支配の農政を取り除き、大東亞共榮圈の自給自足を目標に農政上の組織替を遂行するならば、大東亞共榮圈の資源は其が自主體制を確立せしむるに役立つの

みならず、延いては戦後の世界新秩序を建設する原動力ともなるであらう。

偕て、かゝる大東亞を對象とする農政は其の目標を那邊に置くべきであるか、それは一言にして云へば、大東亞には大東亞のみが産出出来る重要な資源があつた。即ちゴム、茶、米、砂糖、生糸、大豆、麻、落花生、キナ、コブラ、桐油、煙草、コーヒー等が多く産出せられてゐた。

上述の如き農産物は、必ずしも絶對に他の地域で生産できぬものとは斷じ難いが、此等の農産物を大量に栽培するには豊富にして低廉な労働力を備へ、栽培並に加工の技術が伴はねばならぬ。且つかうした生産方法によつて各地方に輸出し得るだけの力を持たなければならぬ。現に大東亞戦争が起る前には、各種農産物がかうした生産方式により生産せられて歐米諸國に送られたのである。

歐米諸國が大東亞の農業資源に依存した主なものとしては、右の内ゴム、生糸、キナ、マニラ麻、米、桐油等であり、此等を今後國內で生産して行くには國內民族をして單に農業のみならず、更に高度國防體制の確立に協力させねばならぬ。而して大東亞高度國防體制の確立には、共榮圈内の各國各民族をして各地域毎に努力させねばならぬ、就中農の分野に於て協力させることが必要である。

此の場合、先づ第一に考慮しなければならぬのは、工業と農業との相互關係である。重化學工業が長足の進歩を遂げつゝあるとき、農業も亦之と相伴ふて發展しなければならぬ。其の爲には、土地、労働、資本等につき充分なる検討を加ふる必要がある。

第二には、食糧、原料農産物の生産供給を確保し、共榮圈内部のみにて自給自足出来るやうに工夫しなければならぬ。

第三には、人口資源を確保する爲めの源泉としての農村を確立し、農民を育成しなければならぬ。之は國々に依り、民族に依り、其の程度を異にするが、指導國たる日本に於ては軍事的經濟的政治的見地よりして、一定數の農民を必ず確保しなければならぬのである。

偕て然らば、大東亞農政の基本目標たる大東亞高度國防體制の確立には、大東亞農産資源を如何に利用しなければならぬかと云ふに、元來日本を除く大東亞の地域は長く英・米・蘭・佛等の植民地乃至半植民地であつた。彼等が此等歐米諸國の支配下に永く置かれた爲め、其の無盡藏の農業資源は大東亞諸民族の發展に役立たず、逆に反つて是れあるが爲めに歐米諸國より壓迫され、弱化されたのであつた。即ち先づ第一に大東亞を植民地乃至半植民地とする各國は、其の國の政治經濟力の地位に應じて、専ら自國の立場を本位として大東亞の農業資源を利用した。かゝる本國中心の植民政策は、共榮圈内各地域の土地利用や作物の種類に夥しい一方性を帯びさせた。マライと蘭印ではゴムに主力を注ぎ、比島やジャワでは砂糖に力点を置き、又支那と蘭印では茶に力を注ぎ、日本や支那は養蠶に努力し、又比島ではマニラ麻に力を注いだ。斯るは全く歐米諸國の恣意によるものであつて、斯く共榮圈内の諸民族を畸型化することによつて、自己を有利化させたのである。それのみならず、歐米諸國

は自己の都合のみによつて勝手に植民政策を變更し、損失を植民地半植民地に轉嫁したのである。歐米諸本國恣意の現れの第二は、其の農業資源利用の方向が投下資本の高利潤や本國財政収入の確保にあつたことである。それ故、本國の經濟力の弱い和蘭植民地の蘭印の如きはジャワ其の他の一部のみしか開發せられず、ニューギニアの如き殆んど未開發の状態に残され、佛印の如きも専ら交趾支那に重點が置かれて、他の地域は全く等閑視せられる氣味であつた。

高利潤を確保する爲めに、歐米諸國は南方に於てゴム、茶、コーヒー等につき農園制度を採用し、經營の指導權は歐米人が握り、インドネシア人は少數の土地所有者が若干の利益を受くる外は、勞働者乃至苦力として最低の賃銀収入に甘んじて來た。然も、同種類の農業を營む住民に對しては放任政策を採り、飽まで農園經營者としての地位と權威を確保して來た。又歐米資本は華僑を援助して米穀小麥粉等の取引又は加工に關して獨占的支配をなし、此の方面でも原住民を壓迫して來た。

大東亞農政の目標とする處はかゝる歐米の植民地抑壓制度を拂拭するにある。唯此の場合留意しなければならぬのは、從來歐米諸國の抑壓下に利潤追求を中心としてなされた來つた圈内農村と、其の間に自然力と民族性と民族文化により培はれ來つた農政とを判然區別しなければならぬことである。

以上の如く、歐米諸國は大東亞共榮圈を長きに亘り壓迫し來つたので、原住民は概ね貧困であり、農業技術の如きも著しく立ち遅れて居る。元來、原住民農業は家族を單位とせる小規模なもので、食

糧の自給自足を目的としたものであつたが、歐米の支配によつて單一商業作物の栽培を強制せられ、其の上に價格や稅等の點で不利な立場にあつたから、獨立農業者たるの性格を失ひ、勞働能率は低下し、技術水準が永く停滯するに至つたのである。此のやうに、住民生活が低かつたので、動もすると本國に對する反抗運動が起り、植民地統治上に不安がないではなかつた。

大東亞民族の大部分が窮民として存在したことにより、上述の如く民族反抗運動の原因となつたが、他面に於て共產主義が附け込む餘地を與へたのである。其の顯著な例は支那である。北支に於ける棉花増産計畫の實行や、食糧の供給や、合作社の組織等が共產主義的工作の爲めに妨害されたことは豫想の外であつた。南方民族も、農政方針如何によつては此のやうな状態を現出しないとも限らないであらう。よしや、共產主義思想の跋扈迄に至らなくとも、極端な排外運動を惹き起す危険がある、それ故に大東亞農政は其の目標を高く又大きく持ち、經濟政策と民生政策と思想政策とを綜合して樹立しなければならぬのである。

畢竟、歐米各國が本國中心に行つて來た政策を指導國家たる日本が中心となつて統一し、前者の轍を踐まぬやう留意して、大東亞農産資源利用を大東亞民族の爲めに實施し、直接彼等に役立つやうにし、以て共榮圈内各民族の生活水準を高め、勞働能率を増進させ、技術を向上せしむるやうに努力しなければならぬ。斯くして始めて共榮圈内各民族が大東亞建設の責任を果し得るだけの實力を持ち、

其の義務感を懐くに至るのである。

二

大東亞戦争が歴史的に勝利であつた爲め、歐米の軍事的經濟的據點は完全に覆滅された。それ故、今後大東亞の資源は大東亞民族の意志によつて、圈内民の利益の爲めに開發されねばならぬ。そして之により、農産物の自給自足體制が確立されねばならぬ。かゝる對策を講ずるに當つては次の諸點を注意しなければならぬ。

其の第一は食糧自給である。圈内食糧は現在大體自給出来る状態であるが、今後人口が増加し、生活が向上すれば消費も増加することであらうし、又軍事的必要から食糧を地域的に確保しなければならぬし、又他國との交流等も起るのであるから、食糧の生産計畫は特に慎重に検討しなければならぬ。

第二に工業原料中の不足物資は、戦争遂行の見地から最低限度の生産を確保するやう努力しなければならぬ。

第三に我が國は共榮團建設に當り、指導者として活躍してゐるのであるから、日本の需要する農産物確保のために特別の努力がなされねばならぬ。

第四に農産物自給を確保し、大東亞の自足經濟を達成させるに當つては、國民の消費状態の變化や

數量の調整等を常に考慮し、原料農産物、特に棉花、繭、麻等の衣料原料の如きは日本内地の農工業の關係や、戦時に於ける用途の轉換を考慮し、綜合的且つ計畫的に對策を立てねばならぬ。

第五に大東亞共榮圈内の農業を組織化し、計畫化するに當つては、各地域の民度に應じ、適當に統制しなければならぬ。

以上の諸點に留意しつゝ、指導國家たる日本が大東亞農政を遂行するに當つて有する責務の重大性を考へて見よう。

先づ、大東亞共榮團を確固不動のものたらしむるには、日本は軍事的に、經濟的に、將又文化的に現在以上に強くならなければぬ。而して此の爲めには、内外地農業は如何なる役割をなすべきであるか、又如何に變化して行かねばならぬかを考慮する必要がある。それと同時に、共榮團の農政を指導する直接責任者たる日本の農村行政も、其の機構が統一され、一元化されねばならぬ。それには、先づ第一に、内地農業は食糧増産と人的資源確保の意味から今後最も重視されねばならぬ。併し、重化学工業の發展によつて人口の再配置が必須とされ、他面耕地増加に限度があるから、食糧自給は漸次困難となる。併し乍ら、環海國家たる日本は、有事の日に於ける海上輸送の事を考慮して日本内地の耕地を出来るだけ利用して農産物の増産につとめねばならぬ。其のためには、技術の高度化と耕地利用度の増進がなされねばならぬのであつて、其の實現には農林行政機構と農林團體の根本的刷新が必

要であるが、農業團體の統合は既に一應の目鼻がついてゐる。

第二には内地の農家は食糧増産を擔當するのみならず、皇軍の支柱であり、都市人口の培養源であり、開拓民の送出所である。故に、精神的にも、經濟的にも、其の基礎の鞏固な農家を持たなければならぬ。換言すれば國本としての適正農家を育成しなければならぬ。かゝる農家の育成は、今後における我國農政の重大問題であつて、食糧の確保と、人的資源培養のため、速かに之が實現に着手されねばならぬ。

第三に朝鮮や臺灣に於ける農業並に農民の問題である。朝鮮臺灣は今後一層食糧増産の爲め力を盡さねばならぬと共に、他方朝鮮の地下資源の點や臺灣が、大陸と南方に近接してゐる點や、勞働力の豊富な點等に鑑み、夫々の役割を持たせねばならぬ。

第四に以上の諸方策と共に更に進んで、内外經濟の一體化を圖らねばならぬ。就中、食糧の如きは内外地一體の專賣制を實施したがよい。行政機構の點も内外地を統一しつゝ、然も其の個性を尊重して、彼我の緊密化を圖らねばならぬ。

第五に、日本の農村行政機構は内地の農業統制を強化し、又内外地の統一を容易ならしむるやう刷新されねばならぬ。即ち國土計畫が全面的に行はねばならぬ。同時に大東亞圈農業と取組んで綜合的施策を施すに足るだけの實行性を日本自體が備へねばならぬ。從來の日本農政組織を以てしては、

大東亞農政を指導するだけの實力があるとは言ひ得なかつた。

以上に於て大東亞共榮圈の指導國家たる日本が東亞農政上如何なる責務を有するかを論じたが、次に共榮圈各地域相互の聯絡を密接にするには如何にすべきかを語り度い。蓋し、大東亞民族は血縁的に相似してゐるけれども、其の分布は何分廣大な地域に跨り、且つ氣候、風俗、習慣を異にし、文化の程度も異り、歐米本國の分裂政策に禍された爲め、大東亞民族相互の間に對立の状態さへ存在するので、農政の如きも亦區々であつたのである。今後の大東亞農政は此等の現に存在する差違を明瞭に認識して施さねばならぬのである。即ち大東亞共榮圈の自給自足を期する爲め、指導國たる日本を中心として、全體の統一を圖り、農業技術の導入を諸地域に及ぼし、各地域間の物資交流を促進し、之によつて各地域に於ける民族相互に密接な聯絡を有するやうにしねばならぬ。之を細説すれば次の如くなる。

第一は先づ大東亞農政の統一を成し遂げるには從來歐米の各國が、それぞれの利益に従つて恣意的な政策を施し來つたのに對して、日本國家が圈内統一の責任者となつて、全共榮圈農政の中心とならねばならぬ。併し乍ら、大東亞共榮圈内には獨立國家があり、半獨立國家があり、又從來米英蘭の植民地たりし地域もある。斯くの如く、政治的地位が相違すると共に、各民族貧富の度も一樣でない、従つて又之に對する農政も自ら緩急がなければならぬ。換言すれば、各地域の國情、民度に應じ

て農業対策を夫々異にしなければならない。

第二には共榮圏には我國より資本を輸出し、且つ農業技術の指導をなさねばならぬ。勿論農業投資は鑛工業や運輸業等への投資によつて自ら制限されるが、然も是非共之をなさねばならぬ。日本資本は特に優秀な農産加工や、開拓民の手に成る農産物貿易等に集中し、土地改良や合作社や共榮圏内の商業等は各民族資本の手に委することが得策である。此の場合、歐米諸國が嘗て行つた極端なる營利主義に陥らざるやう注意しなければならない。茲に大東亞農政の新局面がある。

次に農業技術の導入である、日本農業技術の進歩には顯著なものがあつて、就中水稻栽培の技術は其の品種改良と云ひ、耕種法と云ひ、土地改良と云ひ、何れも極めて高い發達を示し、農業に關する基礎的研究も世界的水準に到達せんとしてゐる。否、小農經營を對象とする農業の研究は世界に其の比を見ない。それ故大東亞共榮圏の農民を指導するには、曾て日本農業が低い技術水準から急速に進行した經驗の跡を追ひつゝ、新機軸を出して指導することが可能である。併し、自然條件の非常に異つた地域が大東亞共榮圏に包攝されてゐるから、理論的方面と、應用的方面とを夫々個別に研究し、廣汎に推し進めねばならぬ。

第三には各地域に對して日本農業技術を導入するに當つては、各地域の住民の貧富を考へねばならぬが、從來歐米諸國が爲し來つた如く、原住民の農業技術を放任して其の向上を圖らぬやうな態度は

改むる必要がある。故に、今後は農園のみに經營の主力を注がず、原住民農業の向上にも努力する必要がある。共榮圏各地域の住民農業に對する指導獎勵は、各地域毎に官憲の直接指導の方法によるのはよいが、之と同時に出來得べくば特別の民間獎勵機關を設置し、又協同組合や舊農園理管人をも利用し之は動員すべきであらう。

第四に農業技術上の試験研究並に指導獎勵に要する費用は、各地域毎に支辨さるべきであるが、他方に於て原住民の手持資本を積極的に出させ、且つ英蘭等が永年熱帯農業に對して爲し來つた試験研究の成果を十分利用し、且つ歐米人の技術者も其の協力の意志の明白なものは之を利用するだけの雅量があつて欲しい。

次に、大東亞農業生産計畫を樹立するに當つては、大東亞共榮圏内の經濟は何處までも有機的統一體として構成し、之を効率的に運用する必要がある。其の爲には各地域毎に農業と各種産業並に國民生活が調和するやうに留意し、然も必要な場合には何時でも戰費の一部を擔はしむるだけの準備をせねばならぬ。而してかゝる體制を完成するには、農業生産に高度の計畫性を與ふる必要がある。取りわけ、共榮圏の農産資源利用の方向は歐米の舊支配力を脱し、日本を盟主とする自主的な體制を作り出すにあるのであるから、食糧の自給や不足物資の増産や、圏外交流物資の調整等をなすに於て是非とも高度の計畫性を失はぬやうにすべきである。農業は元來自然條件に左右せられるものであるが、

計畫生産の下では此の自然を征服するだけの氣力を各地域の諸民族が持つことが要請される。

上述の目的を達成するには、先づ指導國家たる日本は、其の責任を以て全體の農業生産計畫を樹立し、其の實行は各地域の責任たらしむることが必要である。勿論、各地域の事情により、計畫實行の方法は異なるであらうが、共榮圈全體を通じ、歐米諸國の長きに亘る壓迫によつて民度が低位に止められてゐるから、我國より資本を輸出したり、技術上の指導をしたり、開拓民を送つたり、集荷配給機構を整備したり、更に又價格政策を統制したりする必要もある。猶生産計畫は立地計畫や、肥料、農機具、機械等の資材計畫や、土地開發並改良計畫や、勞力配置計畫等を周到に樹立して實行する必要がある。

次に、共榮圈地域の相互關係を密接にするには、農産物資の交流を圓滑化するやうに計畫を樹立すべきである。大東亞共榮圈内の各地域は産業の發展狀況が違つて居り、又農産物の種類も異つて居るから、相互に有無相通じ、各地域が其の特性に従ひ發展するやうにとつとめ、以て各地域の相互の聯絡を密接にしなければならぬ。重工業や、化學工業や、輕工業の主たる地帯は日本を中心とせる日滿支であり、南方の豊富な農産物を需要するものも此の地帯である。又、食糧の點から見ても、日滿支三國は今後自給度を強くするとしても、尙ほ佛印や泰やビルマに依存する必要がある。又、戰前共榮圈内各地域に對して歐米諸國より機械や化學製品や輕工業品等の輸出があつたけれども、戰爭により途絶

へたのであるから、日本が之に代つて輸出を擔當するだけの責務がある。それ故、我が國の重工業や化學工業は今後急速に發展しなければならぬのであつて、其の爲めには日本自體が樞軸各國より暫くの間援助を受くる必要があり、斯くて大東亞の農産物と此等樞軸諸國との交易が行はねばならぬ。大東亞農産物が共榮圈内で相互に交換されることは、各地域の友好關係増進に役立つのみならず、圈内産業の高度化を齎らすのである。そして、農産物交流の實權は指導國家たる日本に於て把握する必要がある。此の場合、次の諸點に注意が拂はねばならぬ。

第一、各地域間に交流されるものゝうち重要な農産物と共榮圈外に輸出される農産物は、日本が其の責任に於て交流の計畫を立つる必要がある。勿論此の場合、各地域の物資需給計畫が參酌されねばならぬのは言ふ迄もない。

第二に共榮圈内各地域の農産物蒐集機構はそれぞれの事情に應じて統制せられる。併し、圈外への輸出は直接日本が統制を加へ、交流計畫の實行については各地域に其の責任を負はせる。

第三、農産物其の他の物資の圈外圈内に於ける貿易や運輸は、指導國たる日本が其の責任の下に實行する、此の場合、國家自ら其の衝に當ることもあれば、國內の資本家に責任を負はせることもあるであらうが、それは時と場合による。

第四、南方諸地域の農産物は自然條件と住民生活の低度なることによつて生産費が低い。尤も、生

活水準は今後一應高くなると思はれるが、それだけ價格も昂騰するであらう。何れにしろ、其の生産費を基準として價格を決定しなければならぬ。故に内地農産物價格との關係に於て面倒な問題が生ずるであらうから、特別の施策を講ぜねばならぬ。

三

大東亞共榮圏内各地域の人口密度は一樣でなく、疎密處を得て居ない。其の原因は自然條件や、經濟發展段階の差異にもよるが、又他方に於て歐米諸國が自己の利益をのみ考へて、大東亞民族の相互移住を制限したことに由る。従つてかゝる人爲的な制限は除去する必要があるのみならず、大東亞各地域内に今後行はれる各種の産業の再編成を圓滑ならしむる爲め、積極的に勞働力を移動させることが必要である。此のやうに農業其他の産業の綜合的計畫を基準として、人口の疎密を適當に是正して行かねばならない。

併し乍ら、人口の再配置には、單に經濟的な見地のみならず、民族の素質や、民族の生活水準や民族の軍事的政治的地位をも充分に考慮しなければならぬ。然らざれば、正しき人口の交流を期し得ないであらう。

大東亞の民族再配置に就いては、先づ日本人に就いて考へねばならぬ。指導國たる日本は、其の國

民を適當に共榮圏内各地域に配置して、共榮圏を軍事的に經濟的に、又文化的に強化しなければならぬ。かゝる任務の遂行に當つては、大和民族人口の増大を計畫的に圖らねばならぬのであつて、共榮圏内に人口の一部を送り出しても、一定の農業人口が内地に残るやうにせねばならぬ。一定の農業人口が何故内地に必要であるかと言へば、それは一面食糧確保の爲め、他面健兵健民の育成の爲と、工業人口の豫備保有のために絶対に必要なのである。

大東亞共榮圏内各地に送り出された日本人は、重要農産物計畫生産の擔當者として、他民族の間に伍し、計畫生産實行の先頭に立ち原住民の指導に當らねばならぬ。他方、内地に止まる農業人口は、優秀な工業勞働力の貯藏所たると共に、強健な兵力の源泉でなければならぬから、充分に増植率が高くなければならぬのである。

大東亞共榮圏内の移民については次の諸點を注意したい。

第一に内地に於ては、耕地の擴張が行はれたり、勞働力を軍事並びに工業に送り込む必要はあるにしても、技術の水準高き農家を創成することによつて相當の餘力が生ずるから、此の餘力を開拓民として滿洲に移民させなければならぬ。南方諸地域には、主として指導的開拓民を送ることだけで充分であらう。

第二に開拓民を何處へ送る可きかと云ふのであるが、それには重點主義を以つて遂行する必要がある

る。此の場合政府は周到なる計畫を立て、相當なる援助を移民に與へねばならぬ。

第三に滿洲には食糧其他重要物資の増産、人口資源の確保、軍事重要點の確保のため、今後とも益々開拓民を送り出さねばならぬ。従つて是迄行はれた滿洲移住計畫は一層強化されねばならぬのである。

滿洲には移住人口の急速な増加の必要が痛切に感じられてゐる。第四に南方に いて云ふなら、南方資源開發の爲め、セレベス、ミンダナオ、ニューギニア等の外マレーやスマトラに對して指導的移民を若干送り出すことが必要である。南方の各地域は熱帯であるから、健康上日本人には適當でない點も若干あるから、保健や子女の教育については、北方移民以上に特別の施設を講ずる必要がある。

第五に半島民の一部を滿洲へ移民させ、臺灣籍民を南方へ若干移住させ、大東亞建設に協力させるのも一法であらう。此の場合、移民は家族的移民であるのを適當とする。

第六に移民の經營規模は劃一の弊に陥ることを避け、各地の自然的條件、經濟的條件を考慮して彈力性を持たせることが必要である。勿論、自家勞力による經營が主となるでらうが、勤勞移民の觀念に囚はれることなく、雇農等を適宜充分使用して何等差支へない。

第七、農業移民の經營は資本關係、工業關係と密接な連絡を持たねばならぬ。大東亞共榮圈内に於ける移民に就いては、以上の如き點を特に注意を要する必要がある。

四

大東亞圈内南方地域の農業經濟と農民生活は、歐米本國に長く壓迫されて來た爲め、頗る貧弱且つ困窮に陥つて居り、經濟的には自主的に活動する氣力と能力を失ひ、文化的にも遅れて居る。勿論各地域には文化的に進んだ者も少數あるが、然も其の文化は原住農民の生活とは直接關係ないものが多いのみならず、其の思想が歐米文化に影響され、大東亞戰の起る前には、抗日の迷夢をさへ抱いてゐた者も少くなかつた。加之他方に於ては原住農民の窮乏に乘じ、最近には惡質な宣傳を試み、大東亞共榮圈の破壊を企てつゝある共產主義者もある。

此のやうに經濟生活の程度が低いのみならず、英米の自由主義思想や共產主義思想の影響をも受け居る農業組織を樹て直すと云ふ事業は、單純に經濟中心の政策のみを以つて遂行出来るものでない。歴史的に古い原住社會の制度を基礎にして其の指導精神を摺むと共に、現實に即して思想、文化の諸工作を同時に行はねばならぬのである。斯くするならば、原住民に對する文化工作は必ず成功するであらう。何となれば、原住民中の一部が歐米の自由主義、營利主義、個人主義、共產主義等の影響下にあり、彼等は舊本國たりし歐米諸國から無理矢理にそれを押し付けられてゐたのであるから、既に日本の實力によつてかゝる壓迫から解放せられた今日に於ては、必然的に彼等本來の經濟生活や生

活感情に立ち歸るであらう。一時的な迷夢から醒めて、皇道下の大東亞農民生活と家族主義的生活感情を取り入れ、八紘爲宇の指導に基く大東亞農民たるの自覺を持つであらう。

次に、大東亞民族の生活向上を成し遂ぐる爲めの施設に就いて考へなければならぬ。大體、大東亞戰爭勃發前に於ては、圈内各地域の農民は常に歐米資本に壓迫せられてゐたのみならず、共榮圈内部の民族相互の間にも種々なる條件に支配せられて對立關係にあつた。即ち例へば華僑や印度人の一部が高利貸商業資本を以て南方民族を搾取してゐた爲め、それがやがて民族的且つ政治的な對立にまで進んでゐた。此のやうな各國民族間の對立抗争を取り除くことは、可成りの努力と時日を必要とする。其の上に大東亞戰爭は其の性質上極めて凄烈であり、始終決戦に次ぐに決戦を以てしなければならぬので、圈内地域の原住民に經濟的な激動と負擔を課することもあるであらう。然る時は、彼等はたゞさへ從來貧窮な生活をしてゐたのであるから、一層大きな影響を受けることとなる。此のやうな點を考へるなら、大東亞諸民族の生活向上對策としては單に社會政策的方法だけでは不充分であり、それかと云つて單に教育や衛生方面だけを考慮するのでも迂遠の感がある。そこで根本的な方策としては次の如きことが取上げられねばならぬ。

第一は農業技術を向上し、在來の高利貸商業資本との關係を適當に調整し、又農民を協同組合によつて組織し、團結させることに力を注がねばならぬ。れこそが農民生活向上への基礎工作である。

第二に各地域に成立すべき協同組合は、原住民の生活程度に應じて計畫生産の指導役を擔ひ、高利貸商業資本の搾取から農民を解放し、原住民をして大東亞共榮圏の建設に進んで協力するやう導いて行かねばならぬ。

第三に農園方式の農業經營を變へ、別に住民の農業技術を指導し、生産物の蒐荷並に加工を教へ、且つ前記華僑の不當な利潤を抑へる必要がある。

第四に華僑や印度人等の營利商業を統制し、無制限な利潤追求を合理的な水準にまで引き下げしむる。

以上の如き根本的施設と相俟つて、始めて大東亞農民の生活向上を達成することが出来る。

五

印度と濠洲（新西蘭を含む）を大東亞共榮圏の外圍と看做し、之と國交の調整が行はれる日が来るならば、此の地方と大東亞共榮圏は如何なる關係の下に立つであらうか。印度と濠洲とは共に英國の植民地であるが、兩者の自然的條件と社會經濟的條件は根本的に異つてゐる。それ故物資交流の點からしても、日本民族移住の點からしても、亦大東亞農民政策の點からしても、之を別個に取扱ふ必要がある。

先づ物資の點から云ふと、印度は棉花、黄麻を産し、濠洲は小麦、羊毛、畜製品等を産する。此等らの物資を大東亞共榮圈内に輸入出来るとするなら、大東亞の自給自足體制は如何なる變化を受けるであらうか。此の場合、食糧品は是非とも共榮圈内で自給自足しなければならぬ。併し、纖維竝に其の加工品は相當長期に亘つて使用が出来、それを貯蔵することも可能であるから、纖維類のみはある程度迄印度濠洲に依存するやうにしてもよいであらう。尤も、さうして置いて非常時には速かに轉換出来るやう、最低限度に必要な基本的な纖維類は共榮圈内で自給出来るやうにして置かねばならぬ。印度濠洲より此等の物資を輸入する代償として、農業用の資材、即ち肥料、農機具、藥材等の輸出をしてやらねばならぬ。中にも重化學工業の發達助成の爲の援助をすることを充分に考慮して置く必要があらう。

次に、濠洲は日本民族の移住對象地として最も適當してゐる。蓋し、自然條件から見ても内地と相似た點が多いと共に開拓の餘地が大きく、又其の既墾地と雖も利用度が低い實狀である。日本人の移住と同時に漢民族や南方民族の移住を行ふ必要が生ずることもあらうが、此の場合、日本人移民との關係は如何にすべきかといふことは大きな問題である。又現に在住する英支人を如何に處理すべきかと云ふことも深く考慮する必要がある。更に又非常時に際會して、軍時的支配を確固不動たらしむるには、どうしたらよいかといふことも同時に考へられねばならぬ。

次に印度は、國內に各種の民族が地域的に又階層的に複合してゐて、政治的に又宗教的に種々の問題を絶えず起し、大東亞の外圍として、共榮圈内へも影響を及ぼす虞れが大にある。又、英米の勢力が印度洋から退いても、ソ聯の影響によつて共產主義の注入される危険もある。而して印度は、亞細亞南部の重要な大河川地域を扼する農業地帯であるから、印度の農民政策が大東亞共榮圈内に對して影響するところが大である。

以上の如く、濠洲と印度は大東亞共榮圈の外圍として、それぞれ異つた重要性を持つのであるが、此等の地域にまで如何に皇國日本の勢力が反映するかは、一に懸つて今後に於ける日本民族の實力發揮如何に存する。

x

x

以上述べて來た處を要約するに、大東亞共榮圈内に農政を實施するには、曾て米英が主力を注いでゐたやうに、其の本國に必要なゴムとかキナとか砂糖とかを採收する爲の、資本主義經營による農園のみに重點を置いてはいけない。又從來米英の農業指導は各地域の原住民に對して本國に必要な單一作物の栽培を強要してゐた爲に、原住民は多角的農業經營による自給自足の體制を許されてゐなかつた。斯くして原住民は常に其の文化政策に於て暗愚蒙昧を押しつけられてゐたばかりでなく、農業經濟に於ても本國本位の恣意的經營下に苦難の道を辿らざるを得なかつたが、日本帝國指導下に大東亞

共榮圈が確立せられた以上は、斯る帝國主義的農業經營を一擲して、圈内各地域の住民の日常生活に安定を與ふるを第一條件として政策を施し、他方指導國たる日本の必要とする農産物資を供給せしめる爲の農業政策を原住民の生活向上を阻碍せざる程度に於て實施すべきである。

大東亞地域には水産、鑛産、林産の諸物資が多量に存在し、將來は此等天然資源の採集に其の力を注がねばならぬが、之と同時に農業の生産力増強に一層の力を注ぐ必要がある、否な農業は原住民の生活殊に衣と食とに深い關係があるから、農業政策には特に重點を置いて指導せねばならないと云ふのである。

それにしても大東亞圏の農業は單に滿支と南方圏丈の農業對策に止つてはならぬ。共榮圏の指導者たる日本帝國の農村其のものを先づ精神的に、經濟的に、そして人口的に充實し、物心兩面に於て潑刺たらしめねばならない。かうして日本國土上の農村が健全安固なものとなつて始めて指導國家としての兵力、經濟力、精神力の強大化が期待せらるゝのであつて、物心兩面に亘る國土計畫は、大東亞共榮圏指導國に課せられたる最大任務の一つであると云へる。

以上の如くに構想してゐる現代知識層の大東亞共榮圏農業政策は信淵の意圖した宇内混同乃至國土經緯と其の輪廓に於て相通するものがある。信淵が經濟政策の基根は原始産業即ち開物に在る、開物すべきものとしては鑛物林業水産を指してゐたが、其の最重要産物は農産に在りとしてゐた。是れ

彼に「農政本論」とか、「草木六部耕種法」とかの著述を始め、各種の農業に關する著書がある所以であつて、國民生活に最必要な産物を作る農民を保護育成する爲に、一面に於て農民を訓育すると共に、他面各種の社會政策、殊に土地政策を行ふて自作農制度を強行せよと唱へ、更に進んで全國の農村から出廻る農産物資其の他を統制する爲に商業專賣を實施し、從來の商人は新制度の下の使用人とし、各地方には平準館なる新役所を設置し、以て農民より農産物を買上げ、又農民に必要な文化品を供給する爲の仲介をも之になさしめようと考へた。そして物資の買溜めを爲さしめない爲には人民に切符(信牌)を交付せよと云つてゐる、物資の公平なる流通を圖る爲に切符制度のことまでも考へた彼の經濟政策には相當細心の注意が拂はれてゐる。爰まで吟味して來ると、佐藤信淵なる哲學者、經濟學者が早くも時の尖兵として今から一百有餘年前に日本國土に降り立ち、百年後の吾々後續日本國民に皇道國家の統制經濟理論を説示したかのやうに思はれて、彼の透徹したる國家觀と、政治眼と、經濟組織眼に敬服する外は無いのである。

加之、彼は皇國の實力一たび備りたらば、四隣に皇國の武威を輝かして東洋諸民族を皇國の翼下に置くべきことを力唱してゐるけれども、然も彼は徒らに被征服民に奴隸的境遇を強ひては居らず、皇國占領下の各地域原住民には何處までも我が皇祖天神の聖徳を欣會せしむるやう溫き指導の手を伸ばし、其の實際手段としては占領地毎に神社を建立し、此の社殿の前に額かしむることによりて彼等に

各々其の處を得しむべく政治し給ふ日本帝國天皇に對して感謝せしめよと、叫んでゐるのである。

斯くして現代知識人の考察に成る大東亞農業政策理論が細かい點にまで詮索が及んでゐることを除き、其の大體の輪廓としては、信淵の國土經緯乃至宇内混同理論の中に織り込まれて、兩者相通するものがあるのである。

第五章 識見古今に通ず

以上三章に亘りて現下の少壯學者が衆智を集めて練つた大東亞建設理念の如何なるものであるかを説いたが、今を去る一百有餘年前の思想家信淵の思惟した理念も大體如上の思想線に沿ふてゐるのである。固より其の間に存する時代の相違と學術進歩の程度の差によつて、其の思想上に精疎の差別があり、又時代的色彩の著しく異なるものがあるけれども、其の輪廓と構想の經緯だけは兩々よく近似し、交響するものがあるのである。

信淵の著述は最近鶴田惠吉氏が丹念に調査した所により觀ても合計百四部二百四十卷の多きに及んでゐる。そして其の内容を平面的に分類すれば、家學由來書、家學原理書、農政書、開物書、經濟生活書、國土經營書、弊政改革書、經國濟民書、國防書、兵法書、砲術書、造船書、造艇書、歷史書、地理書、經學書、醫學書、製煉書、雅書と云ふやうに（本書第三章附記、佐藤信淵家學類別體系一覽參照）、其の關する處が頗る廣汎で、殆んどあらゆる社會科學並に自然科學に觸れて居り、往く處として可ならざるなき跡を示してゐるが、其の中でも現前の大東亞共榮圈理念と最深く關係するものは

皇道哲學を論じた「天柱記」と「鑄造化育論」と、統制經濟を論じた「復古法概言」外同種の數著書と、世界混同及び大東亞建設理論を扱つた「防海餘論」宇内混同秘策」、「存華控狹論」、「吞海臺基論」等々である。若し夫れ現下統後の農工生産力増強に關する方策の先驅的理論乃至指導書としては「農政本論」、「草木六部耕種法」、「遊歴記事並泉源法」、「丹波巡察記」、「山相秘餘」、「坑場法律」等々があることを再應ながら指摘して置くが、上記の著述に於て信淵は先づ深く皇道哲學の本義を説き、其の根源から演繹し來つて政治、經濟、産業、教育の各方面に亘つて採るべき方策を論じてゐる。彼は斯く多方面に亘る施策を論ずるに當り常に皇祖皇宗の遺徳を讀へ、此の聖徳に隨喜する一國の指導者先づ自ら修養して四民に範を垂れ、其の行くべき道を求めしめんとせるあたり、當に現下の大政翼賛運動理念とも相通するものがある。繰り返して云へば、政治と經濟と道德の一體化を説く彼は、日本國民が皇祖皇宗の遺訓に従ひ、精勵姑くするに於ては、必ずや富國強兵の實を擧げ得るであらう、其の曉に於て日本民族は此の一小島國內に蟄居せず、進んで大に四隣に驥足を伸ばすがよい。然も此の四隣経略は徒らなる攻略の非道に陥ることなく、親征の師が皇祖天神の垂れさせ給ふた遺徳を率先窮行るに於ては、宇内萬邦の民草悉く皇風に靡きて、聖徳の有り難さに感泣するであらうと云ふのが、彼の「天柱記」以下の諸著述に論述する所の要旨である。

現下の少壯學徒が腦漿を絞つて考察した世界新秩序論も、文化政策理論も、農業政策理念も、大體

に於て信淵が抱いた思惟の範疇を彷彿してゐる。即ち日本帝國は一應大東亞共榮圈の主體國として指導者の位置には就くが、然も會ての米英資本主義國が恣に自國本位の經濟組織を強ひつゝ、原住民族を暗愚に残して、故らに文化向上を阻止したる如き所謂舊式植民政策を揚棄して、共榮圈内の民族をして其の農たると、工たると、商たるとを問はず、傳統に基く宗教、風俗、文化を踏襲せしめつゝ、主體國たる日本帝國の指導に信從する限り、各々其の處を與へられて、平和と幸福を享受せしめんとするのであるから、信淵が思惟した皇師の宣撫により土民を心服せしめんとせし方法と全く一致するのである。

大東亞共榮圈建設の先驅的思想たる前記の諸著書に信淵が筆を執つたのは文化年度以降嘉永に至る數十年間であるが、此等の著書に盛られた彼の所想と所論とが現下の日本國民に對して示唆を與へ、現前の大東亞共榮圈理念が決して一朝一夕の作爲によるものでなく、遠く近世日本國家の胎動期に於て明々も堂々と高唱せられ來つてゐたことが判るのである。即ち既に早くも一百年前に、八紘爲宇の顯現を企圖してゐた民族的理念の一端がそれにより窺はれて、吾等後進國民に自強自奮の精神を昂揚せしむるものが、至大であるのである。

第三篇 信淵と明日の日本

第一章 信淵に關する智識普及の功勞者

信淵に關する研究は明治維新後幾多の學者によりてなされて居り、其の論著の數も擧ぐるに遑がなく、此の數多き研究者中には中田公直氏の如く整然たる體系を立てようとしたものもあれば、信淵の學問を部分的に研究したるものもある。而して此等の多數研究者に資料を供給したる學者こそ眞に信淵學普及の功勞者と云はねばならぬ。私の見る所によれば、維新以來信淵傳乃至信淵學に關する資料を學界に提供した功勞者は故人としては先づ織田完之氏と瀧本誠一氏の兩人に指を屈し、現存の人としては鴛田惠吉氏であると思ふ。此等の後進學者が先達信淵の學問智識を普及すべく努力することによりて、信淵の學問が遠く後世にまで傳はり行くのであるから、茲に右三氏の功績を調べて見る、先づ織田氏から語る。

(1) 織田完之氏。佐藤信淵を學界に紹介した最初の功勞者は織田完之氏である。織田氏の傳記は嗣子

雄次氏が昭和四年に編輯した「鷹洲織田完之翁小傳」に明かであるが、之れによれば、織田氏は天保十三年九月十八日三河國額田郡福岡町南高須に生れ、幼名を策助と云ひ、幼時多病であつて、親戚の家に育ち、早川文啓に素讀を受け、曾我耐軒に講義を聴き、十八歳の時松本奎堂に従ひ國事に奔走した。二十一歳の時近村中郷に醫業を開き、元治元年廿三歳の時江戸に出で、常陸に赴き、戦争を見、常野兵談を著す。翌年西國地方に旅行し、長州藩の誤解を受け、岩國に拘留せらるゝこと三年、明治二年放免せられ、後ち仕官して彈正少巡察となり、又若松縣に仕官し、後ち大藏省に入り、内務省の創立に及びて勸業寮員となり、後ち農商務省が設立されてからは同省に移り、同省員として各地に出張して専ら農書を集め、其の集めたる農書數百種に達した。農商務省勤務中「大日本農功傳」、「大日本農史農政類篇」等を編纂し、同省辭職後は碑文協會に匿れて筆硯に親しんだが、大正十二年一月八十二歳で歿した。

織田氏の手に成りたる著述は實に多種多様であるが、今日我國の學界が同氏に負へる學恩の最大なるものは全國に散在したる多數の農書を蒐集したることと、佐藤信淵に關する研究、殊に佐藤家學の最初の刊行者であることである。右の中、織田氏が農商務省在勤中に蒐集した農書は其の頃同省に於て謄寫し、農商務省文庫に保管されてあつたが、惜いかな、大正十二年の大震災に全部燒失して仕舞つたけれども、幸に大震災前に著者の手によつて寫本が作られ、近年逐次刊行せられつゝある。

次に信淵並に佐藤家の家學に關する織田氏の學問的業績としては、農政本論(明治四年)、培養秘録(明治六年)、土性辨(明治六年)、山相秘録(明治九年)、堤防溝洫誌(明治九年)、田畯年中行事(明治十年)、垂統秘録(明治十一年)、内洋經緯記(明治十三年)、致富小記(明治十四年)、種樹秘要(明治十四年)、養蠶要記(明治十六年)、薩藩經緯記(明治十七年)、物價餘論簽書(明治十九年)、農政教戒六ヶ條(同上)、責難錄(同上)、經濟提要(同上)、經濟要錄(同上)、宇内混同秘策(明治二十年)と云ふやうに次々に公刊されてゐるが、降つて明治三十九年には以上の諸著を纏めて「佐藤信淵家學大要」として出版してゐる。以上の如く織田氏は農書の蒐集又は農書著述した外に、佐藤家學を逐次公刊して世の信淵研究者に多大の便利を與へてゐる、佐藤信淵に關する研究が後年に至り盛んになつたのは、實に織田完之氏に負ふ所が多いのである。

(2) 瀧本誠一氏。氏は安政四年九月二十七日江戸麻布龍土町の宇和島藩邸に生る。明治七年の頃、愛媛縣宇和島郡不乘學校で中上川彦次郎等に就て英學を修め、後ち慶應義塾に學び、明治十四年慶應義塾卒業生の資格を以て同塾から和歌山市自修私學校(後の徳修學校)に英語教師として赴任した。其の後新聞記者、雜誌主幹、印刷所經營等の經歷を履み、又約十年間千葉で開墾事業にも従つた。大正三年同志社大學教授、同七年法學博士の學位を受け、翌八年慶應義塾に聘せられ最後まで在職した。此の間東京商科大學を始め、立教大學、専修大學の講師を兼ねてゐた。昭和七年八月二十日歿す、年

七十五歳であつた。瀧本氏一代の事業として最も世間に著聞してゐるのは、其の編纂に係る「日本經濟叢書」(改版「日本經濟大典」)であるが、更に又氏の編纂に係る、「佐藤信淵家學全集」三卷が、信淵の研究者に便宜を與へたものは至大である。最近年に於て信淵に關する研究が盛んになつたのは、一に此の瀧本氏の家學全集編纂に負ふ所が多いのである。尙同氏の著書「經濟一家言」中に中田公直氏の農政學說に對する批評の載つてゐることも、併せて記憶せられねばならない。

(3) 鶴田惠吉氏。氏は上總國市原郡菊間村の人、明治三十七年千葉縣師範學校を卒業し、同國長生郡鶴枝小學校教員となり、程なく同校長に抜かれ在職十五年、後ち東京に出で、文學省囑託の傍ら日本大學に學び、業を終て後ち神奈川縣下に於て高等女學校校長兼實業學校長に任せられ、居ること約十年、病の爲め辭して閑地に就き、爾來悠々著作に精進してゐる。公刊せられたものには、總水房山、井伊大老、少年太田道灌傳等があり。又編輯せるものには、房總叢書二卷、千葉縣教育史五卷、大原幽學全集一卷等がある。又最近に於ては佐藤信淵研究者として知られ、其の近著「佐藤信淵」は考證精密、出色の傳記書として世の推獎するところとなつてゐる。又氏の編輯せる信淵關係のものとしては「校註宇内混同秘策」「佐藤信淵選集」等がある。高齡六十三歳ながら、近來益々絶倫の精力を傾けて「佐藤信淵家學大系」の刊行を志してゐる。從來刊行されたる信淵全集には尙多數の資料が取り殘されてゐるが、目下計畫中の家學大系中には、往年織田氏の集められたものを其の遺族から秋田市の彌高神

社奉賛會に寄附されたものが加はり、更に之を秋田縣教育會が同氏の手を藉り全般に亘り整理し、各卷約五百頁、全十七卷にして公刊することであるから、之が刊行完了の曉には、信淵學研究者に對して一層の便宜が開くるであらう。

日本帝國は家族國家である。此の家族國家に生を享けたる後進の學者が其の先達の學術思想を尊重し、究明して之を次の世に傳へんことに努力してこそ、皇國の文運が隆昌に向ひ、祖宗の精神を永久に維持することが出来るのである。此の意味に於て織田、瀧本、鴉田氏の信淵學普及に關する努力を多とすると共に、其の功勞は永へに記憶されねばならない。

第二章 偉人を観る眼

第一節 偉人の眞姿

現在吾々の眼前で活動してゐる者の中には將來偉人として崇敬せらるゝであらう多くの人々が存在する。併し此等の人々は餘りに吾々に接近して居つて、一面には萬人に勝れた智力、能力、徳性を備へてゐるやうに見えても、他面には人間的行狀の人目に觸るゝものがあつて、全面的に崇敬し得ないと云ふのが實狀である。

人は棺を蔽ふて後ち始めて其の人の價値が定まると云ふ諺があるが、其の意味は現に生存してゐる達人は、其の残り半生に於て、どんな間違を仕出來すかも知れぬことを諷示してゐる。

智徳拔群の偉大な人物は其の生涯を終つてから相當年代を経るに従つて、其の聲名の益々高まり行くのが例である。其の存命中に見られた人間的行狀などは、何時の間にか世人に忘れられて、其の人が渾身の努力を拂つた仕事の偉績のみが世人の記憶に鮮やかに残ることゝなる。之れは恰も彼の富士山を觀る如きものであつて、富士山に登つて見れば燒砂全山に満ちて、其處には何等の魅力をも感じ

ないが、遠く十里、二十里の地點より望めば、文字通り白扇懸倒東海の天で、其の遠觀美の素晴らしさに魅了せらるゝのである。此のやうに、人物のしなすために正鵠を得んには、其の人が棺を蔽ふてから、若干年月を経たる後に於てなさるべきである。

過去の人物を批評する要諦の第一は、當の人物の生存した時代的背景の前にそれを置いて眺むることである。人物は時代の産物であつて、其の時代の社會とか、思潮とか、又は特別な事件の刺戟とか、誘導とかによつて出現したのであるから、かうした社會的背景の諸相を調べ、それとの聯關に於て觀察すべきである。此の心得無くして既往の人物を観るならば、往々にして獨斷に陥り、我々が現に抱いてゐる智識や、思想や、感情を以て律し、眞個歴史上の人物としての相貌を把握し得ないことゝなる。端的に云へば、時代是れ人物、人物是れ時代であるとしてよいのであるから、過ぎ去つた時代の人物を吾人が現に所持する尺度で計量することは一大禁物である。第二には人には長所があると共に短所がある。故に之と云ふ長所が無いと共に格別の短所も無いが、併し全體が人並の水準を保つてゐると云ふ程度の人物ならば、其の人は平凡な一常識人であつて、一地域社會の組頭とか郷長とかには押されるかも知れぬが、到底偉人の列には入れられない。古今の實例に照して見ても、一方に天賦の技能を備へてゐる人は他方に普通人より適かに劣弱な面を備へてゐた。それにも拘らず、其の時代の社會が此の偏つた智能人に大きな仕事を托し、一大任務を負はせたのは其の人の長所を認め、それに深

く信賴したが爲である。之を江戸時代の人物に就て考へて見ても、老練なる農業技術者必ずしも農學者で無い。又達識なる農學者必ずしも農業技術者で無い、更に又之を精神史界に就て見るも、高邁なる心學者は必ずしも教育實踐家ではなかつた。此のやうに人は一面に於て有能であれば他面に於ては不能である。況んや所謂偉人と云はれる程の人は十中八九は其の智能と徳性に於て跛行的であつたのである。それ故に此等の偉人を遠望して批評を試みる時には決して其の人にあらゆる總てを期待してはならぬ。別言すれば文學者を見るに際して科學眼を以てしてはならぬ、由來文學者は想像の世界に生きたものであるから、其の文章語録の中には多分の非科學的事實が介在してゐる。又政治家を見るに教育眼を以てしてはならぬ、彼が政治家である以上、時代の人心を捕ふる爲に或は權謀術數を以てし、又は一時の方便の爲に紅燈綠酒の變應を以てしたかも知れない、併し當の政治家が其の行動と行狀の總決算に於て其の時代の社會又は國家に對して貢獻をなし、其の恩惠を時代の人が享受したものでならば、一切の群疑を拂ふて、之を大政治家の班に列して差支無いのである。

之を要するに、過ぎし時代の人物、殊に一時代に大きな仕事を仕遂げた人物を批評する場合には、寛宏と障篤い同情を以て見なければならぬ。何となれば一つの事業を達成する爲には幾多生活上の、碍と勞苦を伴ふのは當然であるから、單に其の人物の生活の半面に現はれた行狀を過大に取り上げ、之を以て其の人物の全人格を埋没するやうな批判を試みてはならない。古人は死馬に鞭打つことの愚

を誠めてゐるが、過去の人物を批評するには此の考へ方が眞先に立たねばならぬ。言ひ換ふれば、過去の偉人を偉人として尊敬し、其の長所、其の美點、其の功績を讀ふことによりて、現代社會が淨化され、現代人を奮起せしめ、次代社會に對する示範と教訓を傳へて、國家發展、社會隆興の原動力たらしむることに在るのである。

現在吾々の棲息してゐる國家社會が優秀な指導者によりて經營せられ、日に月に進歩しつゝあるやうに、過去の國家社會も亦大小の指導者によりて運営せられたことは本書卷頭に於て説明を試みた江戸時代の農村指導者に見ても明かであるから、過去の指導者に對しては其の官僚たると、民人たると、又男女たるとを問はず、一齊に其の人物の長所と優點を認めて感謝報恩の情を捧ぐべきである。今の社會に呼吸してゐる吾々が過去の偉人を尊敬することから、吾々の胸奥に自奮敢行の念が起り、次代社會建設への熱烈なる思慕が湧くのである。

悠々三千年の歴史を誇る日本帝國が今日あるのは、過去に於ける幾千億萬の同胞の血と汗との結集の賜である、否な過去の時代を代表したる若干少數偉人の挺身指導により與へられたる民族的遺産である。日本國家の彌榮を祈る吾々現代人が、過去の偉人を讃仰する心理的動因たるや、斯くも遠く、又深いものがあるのである。

第二節 信淵の場合

偉大なる思想家としての信淵、殊に國學と社會經濟學とを渾然打つて一丸とし、それにより皇道國防國家體制を樹立して後代の日本國民に其の行くべき方向を示したる信淵の思想は、萬人之を認めて敬仰息まざるものがある。併し彼の生涯は決して平々坦々たるものではなく、其の八十餘年の生涯は云はゞ荊の道であつた。

信淵が歩いた行路の上に横つた第一の險阻は生活上の困難であつた。彼が家は元來醫者であるから、其の生地たる羽後の西普内郷に靜居して醫業に従事してゐれば、別に生活上に著しい困難もなかつたであらうが、彼が旺盛なる氣力と、學問慾と、放膽なる性格とは彼をして一寒村の醫師たることを許さず、年少亡父の勧めにより、江戸に出て、蘭學を學び、後ち平田學に參向して國家經濟學者となつたが爲に、彼は家傳の醫業と離れざるを得なくなつた。醫業に離れたる後の彼は多く各藩の顧問學者となり、甲藩に二年、乙藩に三年と云ふやうに勤仕し、其の間に該藩財政上の立直しを彼一流の經濟理論に即して建言し、其の藩で用が濟めば又傳手を求めて次藩に至り、其の藩の顧問として働くと云ふことを繰り返したのである。彼の學問思想は彼の呼吸した時代とは餘程懸け離れてゐたから、往く處必ずしも悉く彼を迎へた譯ではなく、隨つて屢々顧問勤仕の途を失ふて江戸に出て、陋巷に蟄

居して不得手な醫業を開き、患者に藥を盛りつゝ細々な生活を續けることもあつた。かうした生活を送つてゐた彼であるから、其の身装風采は一見見すばらしく、従つて其の日常生活の如きも同時代の幕府や諸藩の御用學者に比すれば、雲泥の差のあつたことを想はざるを得ない。

第二には彼の學問は今日の學術分科から云へば、所謂國家學に屬するものであつて、私經濟に屬する分は甚少く、且つ又實際的であるべき私經濟論も其の「丹波巡察記」に出てゐる思想、其の他二・三の著述を除けば、當時の社會經濟事情とは相當懸け離れたものであつたから、彼の學問を實地に利用する者が當時の支配者階級に絶無ではなかつたが、實際上頗る少かつた。又在郷の農村指導者中にも彼の追隨者を多く見出し得なかつたのである。此の點に就て想起せらるゝことは、あれ程の達識家、精神家であるから、彼が若し自己の生活方便の爲のみに其の學問を驅使したならば、彼は必ずや幕府又は或る藩の常勤顧問役となつて裕福な生活を營み得たであらうが、かうした卑近な學說に墮せず、飽まで彼の捧持する初一念の皇道國家建設理論家を以て推し通した所に、生一本の學者としての眞面目は通つたが、それ丈け生活苦を嘗むる結果となつたのである。切言すれば、僅かな五斗米の爲に自らを屈するには彼は餘りに氣骨稜々たるものがあつたのである。

第三には彼の思想は高邁ではあつたけれども、當時の社會に對する適應性の乏しかつた爲に、一たび彼が門に入つて學んだ青年でも、後ちに銘々の實生活に入ると彼と離れたことである。之

れは今日に於ても同様であつて、彼等門人が信淵に就て學術を學んだのは必ずしも彼と其の志を同じゆする爲では無く、寧ろ將來の生活方便として、即ち立身出世の階梯として、彼の門に參趨したのであるから、一たび彼の門を出て、或る職場、或る位置に就けば、公儀筋から嫌疑の眼を以て見られる師匠の傍に近寄らなくなつたのは當然であらう。人情の薄きこと紙の如しと云ふ言葉の苛烈さを、彼れは自ら常に痛感してゐたことであらう。

第四には彼が使つた學問材料に就てある。學者に取つて最も大事なものは其の思想の組み立てに必要な材料である。信淵の時代に於て既に多數の支那書が分布せられてあり、殊に支那の農書たる「農政全書」とか「齊民要術」とかを使つたことは故瀧本博士其の他の先輩學者の指摘する所であり、又信淵の國家經濟學の最大特徴とする權貨法即ち統制經濟理論を支那の商國伊尹の書から學んだことも周知の通りである。更に彼の學問は單に支那書のみならず、蘭書並に同時代の日本農學者の農書並に旅行見聞等が多分に織り込まれてゐる。而して又彼はかうした海外の學問思想と日本の實驗農業乃至社會事情とを打つて體系化する爲に平田篤胤の高唱したる國學を以てしたのである。平田門下の一英才として見て、信淵の國家哲學は始めて光るのである。

注意すべきは、斯く多方面に亘る古今の資料を驅使して論議した彼は、其の出典と翻案の原典とを示してゐないのであつて、何處までが彼の意見で何の部分か他から借用したか判らない。之は併し

單に信淵に限つたことでは無く、徳川時代の學者全部に通ずる一般的學風であつたことは私自身が経験して熟知してゐる所である。例へば總ての徳川時代の著書が多かれ少かれ支那文書の影響を受け、又日本文獻としては古典の記紀、農書としては宮崎安貞の農政全書等を引用してゐるものが相當に多いが、其の出典を明記してゐるものは殆んど見當らない。甚しきは一書の題命を取り換へ、之れを全々別人の著書なるかのやうに潤飾さへしてゐて、其の判別に惱まされるのであるが、之は當時の學問方法が頗る幼稚であつて、今日のあらゆる學術書に於て科學的記述が要求せらるゝと著しく相異する時代の様相であつた。それ故に信淵の著述に出典の明示が無いからとて、信淵のみを責むるのは過酷である。

尙重ねて信淵の爲に一言して置きたいことは、彼の手に成つた著書は其の全部を必ずしも出版する目的で書かれたもので無いことである。殊に各藩に奉呈したる文書の如きは彼れ自らの意見書であつて、著書では無い。此の意見書の中に先人の著書の引用を斷る必要もなければ、特に其の奉呈書を著書の形にして體裁を整ふる必要もない。斯の如きは今日政府に對する陳情建白書にも應用してゐない處のものである。前章に擧げた明治以來の信淵學普及の功勞者織田完之氏、瀧本誠一氏、鴛田惠吉氏などの努力によつて、從來佐藤家に傳はれるものは斷簡零墨の小までも之を蒐めて収録され、又は収録されんとするが、かうした彼への後進學者の傾倒は、實は信淵自身は無論のこと、佐藤家歴代

の當主の豫期せざりし處、否な寧ろ地下に迷惑に感じてゐるかも知れない。殊に前にも云つたやうに、建白書、陳情書の類を後年に至つて世の中に出すと云ふやうなことは、毛頭考へてゐなかつたであらうと思ふ。それが、後進學者の尊敬を受けて、世に公表せられ、其の記述方法の非科學性を今頃彼是れ云はれては堪つたもので無い。

私は永い間、學問材料としての日本農民資料を取り扱つてゐるが、各藩家に傳はる作物栽培法とか、一家經濟法とかは主として其の一族の爲に書いたものであつて、著書として世の中に出す爲のものでは無い、隨つて此の種の農書類に織り込まれたる材料には或は支那書の引用があり、日本農書の引用などがあるけれども、それ等のことは一向に明示されてないのが普通である。私はそれを別に剽竊とか、無斷引用とかで責めようとは思は無い、一家又は一族のものを指導する爲に書き留めてあつたのを、後人が印刷して世の中に出すのであるから、吾々自身の勉強と、詮索によつて、其の事を明かにすればよいと考へてゐる。要は先人がかうした材料を驅使しつゝ、練り上げられたる其の書籍の持つ内容如何にある。今信淵の場合に就て、右の如き觀點に立つて彼の著書に眼をさらす學徒が、彼の著書に若干の無斷引用や誤謬を見出したからとて、それで以て信淵の人物全體を否認するが如き態度は、逝ける日本民族の先輩同胞に對する禮儀から云ふても、穩當で無い。

第五に信淵の思想的矛盾に關し重ねて辯明して置きたい。彼は封建制度を揚棄して一君萬民の皇道

國家建設を意圖しながら、他面には封建制度の存続を認め、之を強化し、且つ之を基礎として新日本建設を企圖してゐる面も見えるが、之は彼自ら進んで犯した思想上の齟齬であつて、彼が學識の不鮮明から来る不統一を語るものではない。彼が生存した社會は封建制度の下にあり、それを全々否定することは彼自らの存在を否定する結果となるべきことを自らよく知つて居た。それが彼の思想上にも、行動の上にも端的に現れて居る。彼が若し暮らに彼の所思に基いて突進したならば、彼は迎も八十有餘歳の生命を保つことは許されなかつたであらう。

第六には斯の如く彼の思想と行動とは輻晦の跡が見ゆるけれども、然も尙彼は往々にして幕府の嫌疑に觸れた。彼が江戸に入つてから後一再ならず上總の大豆谷に隠棲し、又武藏の鹿手袋村に退去したのも其の爲めである。此の點からも彼の竝々な生活難が想像されるのである。それにも拘らず、彼が家學完成の爲に、田村の茅屋にうづくまりつゝ、筆を捨てなかつた所に、彼の眞骨頭が現れてゐる。

第七には彼が八十有餘年の長命を保つた爲に、彼の身邊に付き纏つた生活難と、其の筋の嫌疑とにより始終彼を寂寞ならしめたことである。俗に人間長生すれば耻多しとあるが、彼の場合に於ては其の日常生活に關する限り全く其の感を深ふせしむるのである。彼が若し夙に筆禍を買ふて牢獄に繋かれ、其處で不慮の死を遂げてでもしてゐたならば、彼は勤王の志士として後世人にもつと聲高らかに

に、そして輝かしく、筆舌の上に乗つたであらう。それは彼の吉田松蔭が安政元年三月下田から米船に乗じ渡來せんとして捕へられ、後ち又筆禍に觸れて斷罪せられ、以て維新志士としての花々しきを思はせてゐるのと對比すべきである。當時若し松蔭が運よく乗船を遂げて渡米し、逸く彼地の自由主義文化の洗禮を受けてゐたならば、彼の後半世は必ずや別個の吉田松蔭となり了つたであらう。信淵がよく八十有餘年の生涯を生き抜いたればこそ、斯くも多くの力作大著を世に残すことが出来たのであつて、其の長命と忍苦の成果として、次代日本建設の爲の精神的糧を現代人に残したのであると見てこそ、信淵の生涯の全貌が正しく理解されるのである。

最近或一著者は信淵傳をものし、其の書中に於て各方面より信淵の人物を貶してゐるが、其の理由とする所を拾ふて見れば、結局逝ける先人に對する觀方を誤つたからに外ならぬ。著者が若し信淵傳に筆を染むるに當り、單に事實を事實として究明する丈けであつたならば、事はそれに止つたであらう、全篇を通し信淵の全人格を否定するを目的として書いたかのやうに見らるゝ其の態度が、學術的に非難され、且つ遺憾とされてゐるのである。

思想家としての信淵、日本精神史界の大立物としての信淵は、決して些々たる側面の小瑕瑾位で抹殺され得るものではない。

信淵の業績は明治十四年九月畏くも明治大帝が奥羽地方を巡幸なされた折り、天聽に達し、其の翌

年六月には特旨を以て正五位を贈られて居る。今日の傳記學者が信淵の全人格を否定し、日本精史界から其の存在を抹殺してよい人物ならば、往年の贈位奏請者の責任にまで溯つて考へらるゝ譯であるが、信淵に關する堂々たる立證否な、非難への反證は、何れ近い内に信淵の専門的研究者によりなさるゝであらう、其の日の遠からざるを待つてよい。

今や國家生死の分るゝ超非常時代に直面する吾々は、眼前に横はる一木一石のそれをも拾ふて之を國家總力の結集に役立たせねばならぬ。況んや一百年前の大思想家として、又日本民族精神昂揚に不滅の功績を樹て、既に郷土の祭神としてまで深く尊敬せられて居る信淵をば、國民全體と共に正當に理解し、正當に批判しなければならぬと思ふ。

第三章 日本精神史上の偉才

信淵の學問人物を現代の學術方法や、社會倫理や、教育原則等に照して觀れば、其處には無論若干議すべき點もあらうけれども、然も彼が生涯を學問研究に打ち込み、其の成果が皇道國家經濟學、大東亞建設の先驅的存在として現代に深く影響してゐる點に就ては、何人も否定することが出來ないのである。

我が正統國學が荷田春滿により主唱せられ、加茂實淵により研究に着手せられ、本居宣長によりそれが具體化せられ、平田篤胤によりてそれを實踐行動に移されたことは周知の通りであるが、今我が佐藤信淵は、平田門下の一人として恩師の國學を社會經濟學に應用して日本民族の進み行くべき正當の方向を示したのである。

斯くて學者信淵の思想は高くして深く、其の間に和漢洋の學を織り混せて實に多彩又多角であることは、其の一小記録に過ぎざる「丹波巡察記」を取り上げて見ても判る。獅子は一狗兒を撃つにも全力を揮つて奮闘すると云ふが、信淵又然り、彼は腰に矢立を挟み、草鞋履にて、しよぼくと田舎の

部落を廻る間にも、其の腦裏には最高度の神道哲學が閃めくかと思へば、眼前の一田夫の言動にも千古の教訓を見出し、其の田夫の實踐を通して一郷一村を建て直さうと志す、歸納的農政理論家でもあったのである。斯くて彼は日本國家學創設の功勞者であり、又大東亞共榮圈確立の可能性を首唱したる大先達である。彼は既往日本の持てる哲學者、政治學者、農學者中の最優者の一人であつて、現代少壯學者の思考を以てしても、皇國農村を基盤とする大東亞學に關する限り、結局、彼が胸中に描いた思惟の世界以上に出でないと云ふ所に、思想家たる彼の眞面目が潑刺として躍動してゐるのである。

(出版會承認)
い 110180 番

佐藤 信淵



〔五・〇〇〇〕

著者略歴

法政大學卒業。法政大學教授。
農學博士。

昭和十八年七月十五日 印刷
昭和十八年七月廿五日 發行

定價 二 圓

印刷、製本特別行爲稅發行所負擔

著者	小野武夫
編輯者	高島政衛
發行者	潮文閣
發賣所	東京市小石川區小日向壘町一ノ四一
印刷所	東京市板橋區板橋町三ノ六四
配給元	東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

176
5

終

